

ハーディ研究

日本ハーディ協会会報 No. 37

The Bulletin of the Thomas Hardy Society of Japan

日本
ハー
ディ
協会
会報

37

ハーディとカントリーハウス		
— ジェイン・オースティンとの比較を通して	坂田薫子	1
『エセルバータの手』における使用人の表象		
— 文化的アプローチ	西村美保	15
“We and the Rest of the Country”		
— <i>The Trumpet Major</i> におけるナショナリズム	土屋結城	29
詩に描かれた生き物・時・人間に関する「多様な読み」		
から垣間見るハーディ像	渡 千鶴子	43
Synopses of the Articles Written in Japanese		56
日本ハーディ協会会則		61

二
〇
一
一

日本ハーディ協会
2011

ハーディとカントリーハウス ——ジェイン・オースティンとの比較を通して

坂田 薫子

序

トマス・ハーディ (Thomas Hardy) の小説『微熱の人』(*A Laodicean*, 1881) において、最も存在感のあるものは何かと問われれば、それは、そのどちらかを題名が指し示していると考えられるヒーロー、ジョージ・サマーセット (George Somerset) か、ヒロイン、ポーラ・パワー (Paula Power) ではなく、常に事件の背景に聳え立つスタンシー・カースル (Stancy Castle) であると答えることができるかもしれない。マーク・ジルアード (Mark Girouard) の分析に拠れば、これまでイギリスに存在したカントリーハウスやそれを内包する地所とは、その持ち主に政治的、経済的、社会的権力をもたらすものであり、またその権力を周囲の者に見せつける権化であった。そして、レイモンド・ウィリアムズ (Raymond Williams) の研究が示すように、これまで文学作品に登場してきたカントリーハウス群は、階級間闘争の表現の場として用いられてきた。となると、ハーディが自らの作品の背景として選んだ、「城」という名を持つカントリーハウス、スタンシー・カースルも、物語を通じて何らかの象徴的役割を担っているのではないかと勘繰ってみるのも面白いかもしれない。そこで、本論文では、ほぼ全作品を通してカントリーハウスの存在が欠かせないジェイン・オースティン (Jane Austen) の作品との比較を交えながら、『微熱の人』のスタンシー・カースルを中心に、ハーディのカントリーハウス描写から読み取ることができる、彼の主張について明らかにしていきたいと考えている。

1. ハーディの描くカントリーハウス——オースティンとの相違点

『微熱の人』におけるスタンシー・カースルの運命を要約すると次のように

なる。作品の冒頭で、この「城」という名を持つ堂々たるカントリーハウスは、准男爵家の元所有者から、鉄道業で一財産を成した産業界の大君ではあるが、階級から言えば中産階級の商人に過ぎない人物に既に売却されており、さらに物語の結末では、元の所有者の一族の隠し子の放火によって焼け落ちてしまう。

これは、例えば、オースティンの『説得』(*Persuasion*, 1818) におけるケリンチ・ホール (Kellynch-hall) の在り方と比べると、その扱われ方に大きな違いがあることが分る。『説得』において、ケリンチ・ホールは、上流階級の所有者によって暫くの間、海軍軍人夫妻に貸し出されているだけであり、相続者のモラル云々を不問にすれば、やがてその地所は次の相続人に、サーの称号と共に無事に受け継がれることが予想される。

カントリーハウスがその所有者の優れたモラルを映し出し、またイギリスという国家のあるべき理想像を体現するカントリーハウス・ポエムの伝統¹⁾は、オースティンの作品では、多少の不安材料を残しつつ、まだ安泰である。例えば、『高慢と偏見』(*Pride and Prejudice*, 1813) のペンバリー (Pemberley) は、ヒロイン、エリザベス (Elizabeth Bennet) に、その地所の持ち主ダーシー (Fitzwilliam Darcy) の真の姿を垣間見させる。ペンバリーがエリザベスに示すダーシー像とは、理想の領主、家父長、兄、そして未来の夫としての姿であり、理想の領主としてのダーシー像は、イギリスという国家の理想の姿をほのめかす。また、『エマ』(*Emma*, 1816) のドンウェル・アベイ (Donwell Abbey) は、ヒロイン、エマ (Emma Woodhouse) に理想の「イングリッシュネス」(vol. III, ch. vi) を考えさせる場所である。理想の「イングリッシュネス」を体現するドンウェル・アベイの当主はナイトリー (George Knightley) で、領地内のマイノリティに彼が示す配慮は、まだ失われていない旧き良き共同体社会のぬくもりを感じさせる。もちろん『マンズフィールド・パーク』(*Mansfield Park*, 1814) や『説得』などの後期作品になると、カントリーハウス・ポエムから続いてきたカントリーハウスの伝統は怪しくなり始めるが、オースティン作品に必ずと言っていいほど登場するカントリーハウスは、伝統的、保守的イギリスの優れた性質、価値観を体現する場所としての役割を担うことが期待されている。

しかし、ハーディの作品では、カントリーハウス・ポエムから続いてきたカントリーハウスの伝統は既に崩れ去っているように思われる。例えば『ダーバヴィル家のテス』(*Tess of the d'Urbervilles*, 1891)の中でエンジェル(Angel Clare)がテス(Tess Durbeyfield)との新婚旅行の滞在先として選んだダーバヴィル家の旧邸宅は、既にマナー・ハウスとしての役割を終え、とどめているのは不吉さだけで、今では単なるファーム・ハウスとして使用されているに過ぎない。あるいは、『エセルバータの手』(*The Hand of Ethelberta*, 1876)に登場するネイ(Alfred Neigh)の地所、ヘアフィールド・エステート(Harefield Estate)には屋敷は建てられておらず、そこは現在厩馬屠殺場として使用されている。ハーディ作品におけるカントリーハウスとそれを内包する地所は、もはや伝統的、保守的イギリスの優れた性質、価値観を体現する場所になってはいない。

別の視点から考察してみても、『森に住む人々』(*The Woodlanders*, 1887)のヒントック・ハウス(Hintock House)のように、鉄工業で財を成した豪商に買い取られていたり、『テス』のスロープス(The Slopes)のように、金貸しの成金が上流階級に仲間入りするために、マナー・ハウスを真似て近年になって作ったものであったりと、他のハーディ作品でも、カントリーハウスがその伝統を保ったまま、物語の舞台としてその作品に欠かせない存在となっていることはほとんどない。²⁾

『エセルバータの手』や『微熱の人』のように、カントリーハウスが、象徴としても、物語の舞台としても重要な存在となっている作品においてできえ、受け継がれるべき旧き良き伝統を記号化していたオースティン作品におけるカントリーハウス像を、ハーディの作品に見つけようとしても徒労に終わる。『エセルバータの手』のライクワース・コート(Lychworth Court)は、内実を伴わない、形骸化してしまった貴族階級の伝統や、その腐敗振りを象徴する「入れ物」としての、単なる建築物に成り下がっているし、『微熱の人』のスタンシー・カースルは、イギリス社会の未来にとってはもはや不必要なものとして、これまでそのカントリーハウスが内包してきた上流階級の伝統と共に消え去る運命にある。こうした点において、オースティン作品におけるカントリーハウスと、ハーディ作

品におけるカントリーハウスが記号化しているものは大きく異なることがうかがえる。³⁾

2. ハーディと階級問題

このように、オースティンとハーディのカントリーハウスの取り扱い方を見ると、一見したところ、上流階級への敬意という点においては、二人の態度には大きな隔たりがあることが分かる。しかし他方で、もう一步踏み込んで観察してみると、双方とも、多分に保守的であるという共通点を持っていることがうかがえる。

文学作品におけるカントリーハウスの伝統を考えると、カントリーハウスに誰が住むのか、その人物はどの階級に属するのか、上流階級なのか、新興階級なのか、それとも生粋のイギリス人なのか、クレオールなのか、またカントリーハウスの財源はどこなのか、本国での農業か、商売か、あるいは植民地での搾取なのか、などが大きな問題となる。そして、その所有者がカントリーハウスをまともに運営できるのが、作品理解の鍵となる。

意外に思われるかもしれないが、実は、オースティン作品において、まともに家の管理ができるのは、爵位を持たない人々である。ダーシーもナイトリーもジェントリー階級ではあっても、貴族ではない。他方、准男爵の尊称を持つサー・トマス(Sir Thomas Bertram)やサー・ウォルター(Sir Walter Elliot)は、家父長としてはまことに不適切である。カントリーハウスがイギリスを象徴しているのなら、オースティン作品では、イギリスの未来は貴族階級ではなく、エスクワイヤー(Esquire)と呼ばれる郷土や、軍人を含めたジェントリー階級に託されていると考えてよいだろう。ただし『高慢と偏見』において、結局ロンドン商人のガーディナー(Mr. Gardiner)が中心に据えられることがないという事実は、商業から上がってくるお金では、土地から上がってくるお金のように、「イングリッシュネス」を保てないということを示しているのかもしれない。そう考えると、オースティンは保守的であると言われるのは当然のことにように思われる。

オースティンの保守性が、多くの場合、新興階級を切り捨てることはないもの

の、彼らを周縁に追いやった上で、最終的にはジェントリー階級のヒーロー、ヒロインに、イギリスの伝統を体現させたカントリーハウスを治めさせる点に見られるとすれば、ハーディの保守性も、一方でオースティンとは異なり、誰がカントリーハウスを統治するかで示されることはないものの、他方で、オースティンに似て、イギリスの未来が上流階級に委ねられることがないだけでなく、無条件で新興階級に託されることもない点に読み取ることが可能である。

例えば『微熱の人』では、新興階級の手に入ったスタンシー・カースルは焼け落ちることから、ハーディにおいても、カントリーハウスに象徴されるイギリスの未来は、まだ全面的に新興階級に託されているわけではないことがうかがえる。ポーラはド・スタンシー家の伝統の前では結局のところ無力であり、植民地での取引で采配を振るい、アナーキズムに加担した経験を持つアブナー (Abner Power) でさえ、ド・スタンシーの血を引くデア (William Dare) を負かすことができない。おそらくスタンシー・カースルの再建は、ポーラに、と言うよりもむしろ、ポーラと結婚し、スタンシー・カースルの文字通りの「再建」を任された、サマーセットに託されていると考えられる。サマーセットはリベラルではあっても、ラディカルではなく、その気質は多分に保守的であり、ちょうどマシュー・アーノルド (Matthew Arnold) がペリシテ人 (Philistines) と呼び、批判した中産階級を導くために必要だと説いた教養を備えている、アーノルドの理想を体現したような知識人 (a man of culture) である。⁴⁾ ここに、カントリーハウス・ポエムからオースティン作品にまで通じるカントリーハウスの表象を重ねれば、イギリスの再生を暗示するカントリーハウスの再建は、新興階級ではなく、知識階級に託されているということになる。もちろんハーディは知識階級の教養のみでは時代の再生には不十分ということも心得ており、サマーセットとポーラを結婚させることで、スタンシー・カースルの再建には、新興階級の活力と財政力も欠かせないことをほのめかすことも忘れてはいない。

ここで、二十世紀の作家、E・M・フォスター (E. M. Forster) の『ハワーズ・エンド』 (Howards End, 1910) に描かれたハワーズ・エンド邸の相続劇について考察してみよう。『ハワーズ・エンド』の批評史では、厳密にはカントリー

ハウスではないハワーズ・エンド⁵⁾ もまた、イギリスの象徴であり、イギリスの歴史を継承してきた場所として読まれてきている。⁶⁾ この邸宅は、物語内では、土着の自作農ハワード家から、アッパー・ミドル・クラスの実業家ウィルコックス (Wilcox) 家を通して、ドイツ系イギリス人の知識階級シュレーゲル (Schlegel) 家へと受け継がれていく。⁷⁾ 一方で、商業によって得られたウィルコックス家の富が資本にならなければ、ハワーズ・エンドの存続は不可能であったことは確かで、そのことはハワーズ・エンドの守護神のようなミス・エヴェーリー (Miss Avery) でさえ認めている。マーガレット (Margaret Schlegel) が、ウィルコックス家の人々が重んじる価値観が文明を築いてきたこと (88) を、そして、ウィルコックス家のような人々がイギリスを繁栄させてきたこと (149, 233) を主張するとき、『微熱の人』と同様に、さらにさかのぼれば、『高慢と偏見』のガーディナーの存在がほのめかしていたように、新興階級のもたらす富や影響力なくしてはイギリスの繁栄は有り得ないことが、『ハワーズ・エンド』でも強調されていることがうかがえる。しかし他方で、『ハワーズ・エンド』では、物理的に (つまり金銭的に) は、新興階級の商売による富 (とその富をもたらした活力) が必要不可欠であることを認めた上で、英国性の存続には、その精神面を支える階級である知識階級が絶対に必要であることが主張されている。このように、『微熱の人』においても、『ハワーズ・エンド』においても、英国性を支えるのは、中産階級の富と、知識階級の教養であるということ、双方の邸宅の相続劇は暗示しているである。

ハーディ作品におけるカントリーハウスの分析に戻ると、次に、『エセルバータの手』では、貴族の館ライクワース・コートに、平民の娘エセルバータ (Ethelberta Chickereel) が正式な妻として乗り込むことになる。しかし、その結婚において、彼女に精神的充足が保証されているとは考えにくく、高齢のマウントクレア卿 (Lord Mountclere) との間に今後嫡出子が生まれる可能性を期待させる展開もない。それはちょうどオースティンの『説得』で、ケリンチ・ホールが一時的にクロフト提督 (Admiral Croft) 夫妻の手に渡ったのは、借金で首が回らなくなっていたサー・ウォルターの財政を正すためにすぎず、甥のエリオット氏

(Mr. Elliot) が爵位と地所を相続することになれば、更に次の世代のことはクレイ夫人 (Mrs. Clay) の存在がほのめかすように不確かではあるものの、取り敢えずケリンチ・ホールはエリオット家に受け継がれていく様子に似ている。ライクワース・コート女主人となったエセルバータの役割は、マウントクレア家の財政を立て直すことにあるのであって、ライクワース・コートは、マウントクレア卿亡き後は、その弟のマウントクレア氏 (Mr. Mountclere) に渡ることを予想させる。商売で財を築いた新興階級のみならず、カントリーハウスの運営が任される未来は、オースティンにも、そしてハーディにもまだ描かれることはない。

3. ハーディと大英帝国

サイード (Edward Said) の著作、『オリエンタリズム』 (Orientalism, 1978) を契機に、1970年代後半から、文学批評の一つの形態としてのポスト・コロニアリズムが注目されるようになり、それ以降、それまではコロニアリズム (植民地主義) やインペリアリズム (帝国主義) とは無縁と考えられてきた文学という知的領分の中にも、植民地支配を正当化する言説を見出そうとする批評活動が盛んに行われている。特にサイードの『文化と帝国主義』 (Culture and Imperialism, 1993) に触発されるかのように、次々とイギリス小説のキャノン (正典) にもポスト・コロニアリズムのメスが入れられ、様々な議論が行われている。ポスト・コロニアリズム論に準拠した文学作品の読解の有効性に関しては大きく意見が分かれるものの、⁸⁾ イギリス本土で生まれ育った生粋のイギリス人以外をカントリーハウスの相続から排除する態度に関しても、オースティンとハーディには共通点が見られることから、本節では敢えて、ポスト・コロニアリズム論という批評活動を利用して、ハーディのカントリーハウス相続劇が示唆している可能性のある内容について考察してみたいと思う。

まず、オースティンの『マンスフィールド・パーク』をポスト・コロニアリズム論で読解してみよう。『マンスフィールド・パーク』では、『高慢と偏見』や『エマ』で描かれていた牧歌的世界とは異なり、もはや物語の中心を担う邸宅の存続は、いわゆる荘園制の自給自足では成り立っていない。マンスフィールド

・パークの財政を支えているのは荘園内の小作人たちの農業などではなく、アンティグアという海外の植民地から上がってくる収入である。⁹⁾ また、第一巻第五章にマンスフィールド・パークが比較的最近建てられたカントリーハウスであることをほのめかす描写があるので、ポスト・コロニアリズム論の中には、バートラム家は生粋の土着のイギリス人ではなく、サー・トマスがアンティグア出身のクレオールである可能性を示唆するものもある。¹⁰⁾ その可能性を認めると、バートラム家は何世代も前に植民地に渡ったイギリス人入植者の一族で、植民地で財を成し、サー・トマスの父親がサー・トマスをイギリス紳士として教育すべく、若い頃にイギリス本土の教育機関に送り、土地家屋を買い与え、サー・トマスは現在、植民地のプランテーションの不在領主となっていると考えることができるようになる。オースティンの最後の未完の小説、『サンディトン』 (Sanditon) の第十一章には、正真正銘のクレオール、クォーターの混血児、ミス・ラム (Miss Lambe) が登場する以上、オースティンはこうした世事には疎かったと、このような読みを一笑するのはもはや時代遅れとなっている。イギリスの生粋の土地所有階級の仲間入りを果たしたいサー・トマスが、娘マライア (Maria Bertram) とラッシュワース (James Rushworth) の結婚に乗り気になるのも、ポスト・コロニアリズム論で読むと、実に意味深長になるのである。

このように、『マンスフィールド・パーク』をポスト・コロニアリズム論に沿って読解すると、サー・トマスはシャーロット・ブロンテ (Charlotte Brontë) の『ジェイン・エア』 (Jane Eyre, 1847) に登場するメイソン (Mason) 家の人間と同様に、イギリス人の血を受け継ぐ白人である一方で、生粋の白人と区別されたクレオールと呼ばれる立場に位置すると解釈することが可能になる。するとサー・トマスよりも、そして彼の子どもたちよりも、プライス家の娘であるファニー (Fanny Price) の方が、いわゆる「イングリッシュネス」の正統な後継者となる資格を有していることになる。つまり、イギリスの伝統を考えると、異分子と呼ばれるべき人物はファニー (を含むプライス家) ではなく、むしろバートラム家であると言える。もちろん厳密に言うと、ファニーはエドモンド (Edmund Bertram) との結婚の後、マンスフィールド・パークの女主人になるわ

けではなく、牧師館に移り住むので、ファニーがマンズフィールド・パークそのものを引き継ぐという読み方には、ポスト・コロニアリズム論内においてでさえ賛否両論がある。しかし、サー・トマス亡き後にマンズフィールド・パークを相続する予定のトム (Tom Bertram) の肉体的、精神的健康の回復の見込みのなさを考慮し、次男エドマンズの相続の可能性を高く見積もるポスト・コロニアリズム論に従えば、ポスト・コロニアリズム論以外でもイギリスを象徴する場所として読まれることの多い、旧き良き伝統的マンズフィールド・パークは、ファニーがエドマンズと結婚することによって、本来の正しい継承者の手に無事戻っていかうとしていると読むことが可能になってくる。それはどこか、エミリー・ブロンテ (Emily Brontë) の『嵐が丘』(Wuthering Heights, 1847) に登場するスラッシュクロス・グレンジ (Thrushcross Grange) とワザリング・ハイツ (Wuthering Heights) が、リントン (Linton) 家とアーンショー (Earnshaw) 家の正統な子孫の結婚によって、マイヤー (Susan Meyer) の表現を借りれば、「リバース・インペリアリズム」の象徴である異分子ヒースクリフ (Heathcliff) による侵略を退けることで、平静を取り戻す様子を連想させる。

実は、ポスト・コロニアリズム論に準拠すると、これとよく似た構図を『微熱の人』にも読み取ることができる。『嵐が丘』のヒースクリフは、ポスト・コロニアリズム論では植民地の奴隷との間の混血児として解釈されるが、¹¹⁾ ド・スタンシー大尉 (Captain De Stancy) が植民地に駐在中に現地で出会った女性に生ませた私生児であるデアも、現地人の血を引いた混血児と見なすことが可能である。確かに、ド・スタンシー大尉が駐屯地で関係を持った女性が、現地に滞在していたイギリス白人女性なのか、現地生まれのイギリス白人女性なのか、あるいは現地人女性なのかはテキストでは明記されていない。しかしストラー (Ann Stoler 46-51) によると、ヨーロッパ各国政府は自らの植民地において、本国からの移民が現地人の妻や子どもを本国へ連れ帰らないように、婚姻を伴わない同棲を奨励したというので、ド・スタンシー大尉がデアの母親と正式な結婚を執り行っていないこと、そしてデアを嫡出子として公認していないことなどから、相手の女性は植民地の現地人女性であった可能性が高いように思われる。

また、ド・スタンシー大尉の植民地での経験を具象化するデアの退行の度合も示唆的である。デアはド・スタンシー一家の遺伝的悪徳である賭け事好きや、父親譲りの飲酒癖と喫煙の習慣に加え、盗み聞き、不法侵入、ゆすり、盗み、殺人の脅迫など、考えつく限りの不正を働く。前段落でド・スタンシー大尉が関係を持った女性が現地人である可能性について触れたが、二人の間に生まれたデアのモラルの退行の原因もその延長線上にあると解釈できる。なぜならば、前述のストラー (67-70) の研究によると、当時、植民地の現地人女性との間に生まれた私生児は、母親の怠慢さと劣等な性質を受け継ぎ、肉体的にこれと分かる特徴を持ち、道徳的な欠陥を持つものと考えられていたことが分かっているからである。『嵐が丘』のヒースクリフを植民地出身の肌の色の異なる部外者と見なすスネイダーン (Maja-Lisa von Sneidern 184) は、ひ弱で覇気のないリントン・ヒースクリフ (Linton Heathcliff) に、混血児に対する当時の人種的差別を読み取っているが、こうした帝国主義的イデオロギーに当てはまるデアのモラルの退行にも、当時の植民地主義的態度が見え隠れする。

もちろん、父親ド・スタンシー大尉をポーラと結婚させることで、彼にスタンシー・カースルを取り戻させた上で、自らの出生の秘密を公にし、それによって自分の嫡出子性を証明し、ド・スタンシー一家の正統な相続人になろうと目論んだデアの大胆な計画は、城の崩壊が暗示するように、達成されることはない。城に放火した犯人がデア自身である点は一見矛盾して見えるが、『ジェイン・エア』のソーンフィールド・ホール (Thornfield Hall) のように焼け落ちてしまうことで、スタンシー・カースルはデアによる「リバース・インペリアリズム」という侵略から身を守るのである。文学作品に登場するアイルランドのカントリーハウスの表象を分析したケルスオール (Malcolm Kelsall 5) の研究書によると、カントリーハウスを焼き払う行為は、本を焼く行為に似て、極めて象徴的であり、家が表象しているものへの憎しみや恐怖を表しているという。焼け落ちるスタンシー・カースルは、ソーンフィールド・ホール同様、植民地主義という大英帝国の腐敗した過去を象徴しているととらえることが可能である。しかし、バーサ (Bertha Mason Rochester) は死んでもロチェスター (Edward Rochester) は生き

残り、また、スタンシー・カースルという入れ物は焼け落ちて、ド・スタンシー大尉も、そしておそらくデアも生き残っているという事実は、シニフィアン (signifiant, signifier) は消し去ることができても、シニフィエ (signifié, signified) は消えることはないという現実を指し示しているのかもしれない。

このように、カントリーハウスがイギリス国家を象徴し、その当主がイギリス国家を統治すべき理想像を指し示す象徴だとすると、オースティン作品でもハーディ作品でも、ここに生粋のイギリス人以外の血が入り込むことはなく、ポスト・コロニアリズム論で読めば、二人のカントリーハウスの取り扱い方に、当時の植民地主義的態度を読み取ることができるように思われる。

結びにかえて

オースティン作品とは異なり、ハーディ作品では、カントリーハウスの相続劇が物語の第一の関心事となることも、カントリーハウスが物語の主要な舞台となることもほぼないため、これまでハーディと文学作品に描かれたカントリーハウスの伝統を関連づけて読むという行為はあまり実践されてこなかった。しかし、本論文で示したように、ジルアードやウィリアムズによるカントリーハウス論を参考に、ハーディとカントリーハウスの伝統を分析すると、階級問題や人種問題に対して保守的な立場をとるハーディの姿が浮かび上がってくる。本論文では、ハーディとカントリーハウスの伝統を、ハーディ以前の作家オースティンとの比較を通して分析したが、今後は、ハーディと同時代の、カントリーハウスの相続劇が小説を読み解く鍵となっていると言って過言ではない、センセーション・ノヴェルとの比較を行ったり、あるいは、例えば本論文の中でも触れたフォスターの『ハワーズ・エンド』や、イヴリン・ウォー (Evelyn Waugh) の『ブライズヘッド再訪』 (Brideshead Revisited, 1945) のような、ハーディ以後の時代の文学作品に描かれた邸宅や地所の相続劇との比較を行うことにより、ハーディの主張の新しさと旧さに関して、より充実した分析を行うことが必要なのではないかと考える。

注

* 2010年10月30日(土)に同志社女子大学で開催された第五十三回日本ハーディ協会大会のシンポジウム「ハーディとカントリーハウスの伝統」では、カントリーハウスの伝統の中にハーディを位置づける試みが行われた。そこに筆者はパネリストの一人として参加し、十八世紀末から二十世紀初頭までのカントリーハウスの社会的、文化的意味の変化を探るために、ジェイン・オースティンとカントリーハウスの伝統についての発表を担当した。この論文は、発表に至るまでの他のパネリストの方々との意見交換に啓発され、オースティンの描くカントリーハウスと、ハーディの描くカントリーハウスの比較を行う目的で執筆したものである。この場を借りてシンポジウムに携わった方々にお礼を申し上げたい。なお、シンポジウムでの発表「オースティンとカントリーハウスの伝統」に加筆、修正した拙論が『ジェイン・オースティン研究』第五号に掲載されているので、興味のある方はそちらも参照されたい。

1) 文学作品におけるカントリーハウスの伝統を論じる際に欠かさないのは、十七世紀に流行したカントリーハウス・ポエムであるが、フォウラー (Alastair Fowler 21) によると、カントリーハウス・ポエムにおいて、地所はその所有者を象徴したり、その所有者と道德的な相補関係にある。また、地所は国全体の見本にもなっている。カントリーハウスの歴史を研究したマンドラー (Peter Mandler) も、その著書の序文で、カントリーハウスは「イングリッシュネスの真髄であり」(1)、「イギリス人の性質の具象化である」(1)と述べている。

2) 『微熱の人』と同程度にカントリーハウスの描写が目立つ『窮余の策』 (Desperate Remedies, 1871) においても、ナップウォーター・ハウス (Knapwater House) は、十八世紀のゴシック小説や十九世紀のセンセーション・ノヴェルを真似た雰囲気作りには大いに貢献しているものの、そこが秘密や犯罪を隠蔽する場所として機能しているかと言うと、そうではない。ゴシック小説やセンセーション・ノヴェルに倣って、ナップウォーター・ハウスも、最終的に「正統な」相続者に引き継がれる大団円を迎えているように見える一方で、スプリンググローヴ (Edward Springrove) とセシリア (Cytherea Graye) はカントリーハウスの歴代の持ち主の血族ではない。こうした少々唐突な相続の在り方に、階級や伝統の継承の象徴を読み取ることは、必ずしも相応しいとは言えないだろう。

3) ハーディ小説で大きな役割を果たす家屋は、上流階級の住むカントリーハウスよりもむしろ、自作農や借地人の住む家屋である。例えば、『窮余の策』ではファーマー・スプリングローヴ (Farmer Springrove) のスリー・トランターズ・イン (Three Tranters Inn) が焼け落ちる様子が、『森に住む人々』ではウィンターボーン (Giles Winterborne) が、『テス』ではダービーフィールド一家が、借地権が切れた後、住み慣れた家屋を追い出される様子が象徴的に描かれている。スネル (K. D. M. Snell) の研究書の第八章に詳しく分析されているように、ハーディは、十八、十九世紀のハイ・ファームイングと呼ばれる、産業革命がもたらした機器、機械に頼った農地改良前後のランドスケープの変化への自らの興味を、自作農や借地人の家屋とその住人の運命に象徴的に描き出している。

4) 実際に第五巻第十一章で、パワー家はペリシテ人 (“uncircumcised Philistines,” 322) に喩えられている。また、ベンギン版の注 (413) にあるように、旧約聖書の中では、ペリシテ人と対立しているのはユダヤ人なので、この作品ではド・スタンシー家をユダヤ系と解釈することを可能にする暗喩が繰り返して使用されている (266, 322)。『微熱の人』では、ウォルター・ペイター (Walter Pater) のようにギリシャをよしとし、ジョン・ラスキン (John Ruskin) やウィリアム・モリス (William Morris) のように

社会のための芸術をよしとし、アーノルドのように知識人にイギリスの未来を託そうとしたという点で、ハーディの結論は実にヴィクトリア朝的である。

5) ハワーズ・エンドは元々、貴族の館(マナー・ハウス)ではなく、自作農の家屋(ファーム・ハウス)だった屋敷である。相続劇が繰り広げられる邸宅が元マナー・ハウスなのか、元ファーム・ハウスなのかにも、作家の考える英国性の相違を読み取ることができるだろう。

6) 例えばウィドワソン(Peter Widdowson)は、その論文のあちこちで“*Howards End/England*”という表記を行っている。原典の第二十四章にも、「この家はイギリスの家であり、窓から見える西洋春楡の木はイギリスの木であった」(176)という示唆的な表現が存在している。

7) ただし、『ハワーズ・エンド』で真に重要なのは、物語が幕を閉じた後、ハワーズ・エンドがマーガレットの次に誰に相続されるかの方にあるとも考えられている。マーガレットが甥を次の相続人に指名する行為は、イギリスを象徴するハワーズ・エンドが、知識階級のシュレーゲル家の介入を経て、今後、アッパー・ミドル・クラスから、(研究者によって、レナード・バスト(Leonard Bast)がどの階級に所属していると考えられるかが異なるため、意見が分かれるものの)ロウワー・ミドル・クラス、あるいは労働者階級に引き渡されようとしていることを物語っているとも言われている。

8) 例を挙げれば、フレイマン(Susan Fraiman)は、ポスト・コロニアリズム論で『マンスフィールド・パーク』を切り刻んだサイドに対して、彼は権威というものに対するフェミニストとしてのオースティンの批判にあまりに不注意であると指摘しているし、ドナルドソン(Laura Donaldson)は、ポスト・コロニアリズム論で『ジェイン・エア』(*Jane Eyre*, 1847)を批判したスピヴァク(Gayatri Spivak)の行き過ぎに物申している。

9) ただし、このあたりの解釈は、テキストの曖昧性により、研究者によって異なっており、アンテイングアのプランテーションからの収益こそがマンスフィールド・パークを支えているという読みと、その収益はマンスフィールド・パークの財政の一部に過ぎないという考え方がある。ウィルトシャー(John Wiltshire)がこれらの対立する解釈について触れている。

10) ギボン(Frank Gibbon)が、オースティンがサー・トマスモデルとして用いたであろう実在の人物の伝記を紹介し、サー・トマスがクレオールである可能性を示唆している。

11) 『嵐が丘』をポスト・コロニアリズム論で読み解いている論文としてよく取り上げられるものは、年代順に、ヘイウッド(Christopher Heywood)、マイヤー、スネイダーン(Maja-Lisa von Sneidern)のものである。

引用文献

- Austen, Jane. *The Cambridge Edition of the Works of Jane Austen*. 9 vols. Ed. Janet Todd. Cambridge: CUP, 2009.
- Brontë, Charlotte. *Jane Eyre*. 1847. Ed. Michael Mason. London: Penguin, 1996.
- Brontë, Emily. *Wuthering Heights*. 1847. Ed. Pauline Nestor. London: Penguin, 1995.
- Donaldson, Laura E. “The Miranda Complex: Colonialism and the Question of Feminist Reading” *Diacritics* 18.3 (1988): 65-77.

- Forster, E. M. *Howards End*. 1910. Ed. David Lodge. New York: Penguin, 2000.
- Fowler, Alastair. *The Country House Poem: A Cabinet of Seventeenth-Century Estate Poems and Related Items*. Edinburgh: Edinburgh UP, 1994.
- Fraiman, Susan. “Jane Austen and Edward Said: Gender, Culture, and Imperialism.” *Critical Inquiry* 21.4 (1995): 805-821.
- Gibbon, Frank. “The Antiguan Connection: Some New Light on *Mansfield Park*.” *Cambridge Quarterly* 11.2 (1982): 298-305.
- Girouard, Mark. *Life in the English Country House: A Social and Architectural History*. New Haven: Yale UP, 1978.
- Hardy, Thomas. *Desperate Remedies*. 1871. London: Macmillan, 1986.
- . *The Hand of Ethelberta*. 1876. Ed. Tim Dolin. London: Penguin, 1996.
- . *A Laodicean*. 1881. Ed. John Schad. London: Penguin, 1997.
- . *Tess of the d'Urbervilles*. 1891. Ed. Tim Dolin. London: Penguin, 1998.
- . *The Woodlanders*. 1887. Ed. Patricia Ingham. London: Penguin, 1998.
- Heywood, Christopher. “Yorkshire Slavery in *Wuthering Heights*.” *The Review of English Studies* 38.150 (1987): 184-198.
- Kelsall, Malcolm. *Literary Representations of the Irish Country House: Civilisation and Savagery*. Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2003.
- Mandler, Peter. *The Fall and Rise of the Stately Home*. New Haven: Yale UP, 1997.
- Meyer, Susan. *Imperialism at Home: Race and Victorian Women's Fiction*. Ithaca, New York: Cornell UP, 1996.
- Said, Edward W. *Culture and Imperialism*. 1993. London: Vintage, 1994.
- . *Orientalism*. 1978. New York: Penguin, 1995.
- 坂田薫子「オースティンとカントリーハウス」(『ジェイン・オースティン研究』第5号、2011年: 21-32頁)
- Sneidern, Maja-Lisa von. “*Wuthering Heights* and the Liverpool Slave Trade.” *ELH* 62.1 (1995): 171-196.
- Snell, K. D. M. *Annals of the Labouring Poor: Social Change and Agrarian England 1660-1900*. 1985. Cambridge: CUP, 1995.
- Spivak, Gayatri Chakravorty. “Three Women's Texts and a Critique of Imperialism.” *Critical Inquiry* 12 (Autumn 1985): 243-261.
- Stoler, Ann Laura. *Carnal Knowledge and Imperial Power: Race and the Intimate in Colonial Rule*. 2002. Berkeley: U of California P, 2010.
- Waugh, Evelyn. *Brideshead Revisited*. 1945. Harmondsworth: Penguin, 1986.
- Widdowson, Peter. “*Howards End*: Fiction as History.” *E. M. Forster: Howards End*. Ed. Alistair M. Duckworth. Case Studies in Contemporary Criticism Series. Boston: Bedford/St. Martin's, 1997. 364-378.
- Williams, Raymond. *The Country and the City*. New York: OUP, 1973.
- Wiltshire, John. “Decolonising *Mansfield Park*” *Essays in Criticism* 53.4 (2003): 303-322.

『エセルバータの手』における使用人の表象 —文化的アプローチ—

西村 美保

序論

『エセルバータの手』(*The Hand of Ethelberta*. 以下 *HE* と略記) は発表当時、批評家や読者¹⁾ にネガティブな反応を引き起こした。²⁾ その主な理由は *Far from the Madding Crowd* のパストラルな小説のモードから一変したことが挙げられるが、この作品における使用人の表象もまた、読者が抱く印象に少なからず影響を与えたのではないと思われる。本稿では、ヴィクトリア朝の使用人の生活と衣服をめぐる文化的コンテクストに照らし合わせながら、使用人の言動やファッションに焦点を当て、『エセルバータの手』における使用人の表象について吟味する。

1. おとぎ話とリアリティのはざままで

(1) 幻想とリアリティを巧みに織り交ぜたプロット

まず、この小説のプロットは幻想とリアリティを巧みに織り交ぜていると言える。ヴィクトリア朝の厳しい階級社会において、ガヴァネスは特殊な立場にあったものの、雇い主にとっては、使用人の一人にすぎなかった。従って、ガヴァネスが雇主の息子と結婚するという事自体、現実には非常に厳しいことだったと考えられる。『エセルバータの手』はエセルバータがその困難を乗り越え、ペサウィン夫人として登場するところから始まっていて、一見おとぎ話のような設定である。しかし、この物語冒頭の設定にも社会の厳しい現実が考慮されている。というのも、エセルバータと家庭教師先の息子との結婚が周囲の理解を得られなかったことが明記されているからだ。しかし、短期間のうちに新郎と義父の死亡という二重の悲劇が起こり、姑、レディー・ペサウィンの固い心を溶かすきつ

けとなり、孤独な状況がエセルバータを呼びよせることにつながった。すなわち、そのような状況であればやむを得ないかもしれないと保守的な読者の理解を誘うような設定に努めている。しかも、エセルバータと姑の関係は公にはされないとすることでリアリティを持たせている。また、最後にエセルバータは貴族のマウントクレア卿と再婚を果たすのだが、これも新郎を 65 歳くらいという高齢の設定にしていることで、読者を多少とも納得させるかもしれない。当時の社会において、階級差を超えた結婚がなかったわけではないが、一般に、結婚後、新郎は彼が属するソサエティから排斥された。³⁾ 老齢の場合、排斥されたとしても、耐える期間は短く、達観の域に達しているかもしれない。二人だけの幸福で隔離された生活もアルカディアのような印象を与えるだろう。

(2) 階級社会の厳しいまなざしの反映

また、エセルバータの出生や現在の秘密を公に知られることへの恐れも当時の階級社会の厳しいまなざしを鮮明に反映している。優雅なふるまいや詩作によって社交界で一目置かれるようになったエセルバータであったが、幸運で野心的な彼女の心に陰りを与えるのが、以前彼女のレディーズメイド(侍女)だったメンラブである。第 34 章に登場するエセルバータの母親からの手紙は彼女を心配する母親の懸念と解決手段が示されている。

Menlove has wormed everything out of poor Joey, we find, and your father is much upset about it. She had another quarrel with him, and then declared she would expose you and us to Mrs Doncastle and all your friends. . . . The worst part will be that your sisters and brothers are your servants, and that your father is actually engaged in the house where you dine. I am dreadful afraid that this will be considered a fine joke for gossips, and will cause no end of laughs in society at your expense. (*HE*, p.263)

メンラブが新たな交際相手でエセルバータの弟、ジョウイからすべてを徐々に聞き出したので、エセルバータの父親、チックカレルはすっかり動転している。今で

は同僚となったメンラブとチッカレルは喧嘩をして、エセルバータとその家族の秘密を雇い主のドンカースル夫人やエセルバータの友人みんなに暴露してやると断言した。姑の死後、エセルバータの姉妹や弟が彼女の召使となっていて、父親は彼女が会食した家で執事として働いているという事実が噂として広まれば、大変なスキャンダルである。

2. 脅かす存在—レディーズメイド、メンラブ

そもそも、このように一使用人がエセルバータを脅かすようになったのはなぜだろうか。そこにはレディーズメイドという使用人の特殊性がある。これには女性使用人の階級における地位も大いに関係していて、通常ハウスキーパーのすぐ下の階級に来るのがレディーズメイドであり、女主人の身支度を主な業務とする彼女は女主人との間に密接な個人的関係があったため、特別な地位にいた。⁴⁾ このため、同僚の召使によって猜疑心と嫉妬の目でしばしば見られたほどである。それでは、問題のレディーズメイド、メンラブがこの小説においてどのように描かれているのか、吟味する。以下は滞在中の旅館で、エセルバータがメンラブにクリストファーが彼女と同じ旅館に滞在中かどうかというプライベートな事柄の調査を依頼するシーンである。その際彼女はメンラブの恋人についても言及し、日頃から二人がプライベートな恋の話をしていることが伺える。

‘Menlove,’ she said, . . . ‘will you go down and find out if any gentleman named Julian has been staying in this house? Get to know it, I mean, Menlove, not by directly inquiring; you have ways of getting to know things, have you not? If the devoted George were here now, he would help—’

‘George was nothing to me, ma’am.’

‘James, then.’

‘And I only had James for a week or ten days: when I found he was a married man, I encouraged his addresses very little indeed.’

‘If you had encouraged him heart and soul, you couldn’t have fumed more at the loss of him. But please to go and make that inquiry, will you, Menlove?’

(HE, pp.43-4)

その後、この用事を済ませて戻ってきたメンラブであったが、今度はエセルバータに住所を探すよう頼まれる。メンラブは実のところクリストファーに関わる一切のことを聞いていたのだが、本屋から届けられた女主人の週刊誌を盗み見したいがために、「メンラブ夫人は問い合わせに行くようなふりをして引き下がった」のだった。⁵⁾ この行為は日ごろから彼女がこんな調子で女主人の私物を盗み見している可能性と、彼女のずるがしこい一面を示唆している。このようにメンラブとエセルバータの間には互いのプライベートを共有し、主人の私物までも密かに手に取れるような親密な関係として描かれていて、当時のレディーズメイドと女主人の関係に近い。もっとも、女主人の部屋の中の会話は通常他人が伺い知ることのできないものであるので、二人の生き生きとしたやりとりは、現実に行われたドアの向こうの会話がそのようなものであったかもしれないと想像させるようなリアリティを持っていると言えるだろう。こうした親密な関係にあったからこそ、エセルバータの弟ジョウイが付き合っている女性、ドンカースル夫人の新しいレディーズメイドがメンラブと知ったときのエセルバータの驚きと不安は大変なものであったのだ。「こんな疑わしい人物が皆そうであるように」とメンラブの手先の器用さについて父親に述べたが (p.219)、皮肉にも、この手先の器用さこそがレディーの身支度を手伝うことが主な任務であるレディーズメイドに最も要求された素質の一つだったのである。結局、メンラブはジョウイにも愛想を尽かし、最後はマウントクレア卿の召使を恋人とし、彼にエセルバータについての秘密を漏らす。マウントクレア卿がエセルバータが執事の娘であることを聞いたのは、この彼のもとで働く召使、メンラブの恋人からであり、マウントクレア卿はエセルバータの秘密を口外しないようにと口止め料を与えるのだった。つまり、二人は情報提供者であり、かつマウントクレア卿に対しても圧力をかけたことになる。

3. エセルバータとメンラブ、その外見とリアリティ

(1) エセルバータのファッション—階級表象、変装、パフォーマンス

次にエセルバータとメンラブの外観の描写に着目する。まず、エセルバータ

に関しては、以下のように、冒頭から、彼女の素性と現在のレディーとしての見た目の差異が強調されている。‘By her look and carriage she appeared to belong to that gentle order of society which has no worldly sorrow except when its jewellery gets stolen; but, as a fact not generally known, her claim to distinction was rather one of brains than of blood.’ (HE, p.33, emphasis mine) つまり、外観からは紳士階級に属し、優雅で幸福そうに見えるが、彼女がその立派さを主張できるのは、血統の良さよりはむしろ頭の良さなのだということである。そして、エセルバータが威厳のある態度で表れると、その地方のすべての人々の注目を集め、こうした彼女の威厳ある態度が続いている間は存在感を示したのだが、人目につかない場所に来ると、威厳を投げ捨て、態度を変化させるなど、その優雅なふるまいが人前でのパフォーマンスに過ぎないことが以下のように、暴露されている。

While this air of hers lasted, even the inanimate objects in the street appeared to know that she was there; but from a way she had of carelessly overthrowing her dignity by versatile moods, one could not calculate upon its presence to a certainty when she was round corners or in little lanes which demanded no repression of animal spirits. (HE, p.34, emphasis mine)

特に彼女のファッションの描写は注目に値する。第9章の冒頭は社交の場で、エセルバータの髪型にある男性の注意が注がれるシーンである。

The two loungers went on with their observations of Ethelberta's headdress, which, though not extraordinary or eccentric, did certainly convey an idea of indefinable novelty. Observers were sometimes half inclined to think that her cuts and modes were acquired by some secret communication with the mysterious clique which orders the livery of the fashionable world, for – and it affords a parallel to cases in which clever thinkers in other spheres arrive independently at one and the same conclusion – Ethelberta's fashion often turned out to be the coming one. (HE, pp.89-90, emphasis mine)

ここで、彼女の髪型は「ひどく変だとか、風変わりというわけではないが、何か

うまく説明しがたい目新しさを確かに抱かせるもの」と表現されている。それは髪型にとどまらず、ファッション全体に及ぶものであるが、社交界に非難されるような奇抜さではなく、目新しさという程度であるところに彼女のセンスと知性が伺えると同時に、流行のさきがけとなるだけの大胆さを備えた女性、それだけ革新的であることを示唆するものと思われる。つまり、階級表象としてのファッションをエセルバータはうまくコントロールし、異性の注目を引くのにも成功している。しかし、彼女のファッションは、彼女のアイデンティティの表れでもなければ、彼女自身を居心地良くするものでもなく、あくまで階級表象であることを忘れてはならない。つまり、彼女にとってそれは世間の目を欺くための変装である。一方、第25章では、王立美術院で二人の兄とエセルバータが会うのだが、この時の彼女の服装は彼らと同行してもおかしくない、目立たない格好をあえてしている。

The dress of their sister for to-day was exactly that of a respectable workman's relative who had no particular ambition in the matter of fashion – a black stuff gown, a plain bonnet to match. A veil she wore for obvious reasons: her face was getting well known in London, and it had already appeared at the private view in an uncovered state, when it was scrutinized more than the paintings around. (HE, p.185, emphasis mine)

このレベルを落とした格好は今ではレディーとして知られる彼女にとって、これもまた、世間の目を欺くための変装であり、居心地が良いわけがない。その上ヴェールまで着用し、顔を隠そうとしている。Geoffrey Harveyはエセルバータの全生活がフィクションのパフォーマンスとなり、分裂した人格になっている点を指摘しているが(Harvey, p.100)、彼女の変装としての異なるファッションは、彼女がどちらの世界にも落ち着かず、それぞれのペルソナ、社会的人格を演じていることを強調している。

(2) メンラブのファッションーアイデンティティ

メンラブの登場はファッションに焦点を置いて描かれている。当時のレディーズメイドの衣服は他のメイドに比べると、上級使用人であり、かつ屋敷に一人しかいないので、シルクやモスリンなど上質な素材で、形や色も自由でファッションブルであった。



図版(参考): 1840年代の茶色地に白のプリントのモスリンのドレス。

Cicely Farrar というレディーズメイドだった人のもの。

(Courtesy of Gallery of English Costume, Platt Hall)

女性使用人のドレスが黒ときまっているわけではない。Isabella Beeton の *Mrs. Beeton's Household Book* にパーラー・メイドの服装についての記述がある。‘... her morning attire should be a print gown and simple white cap... In the afternoon her dress should be a simple-made black one, relieved by white collar, cuffs, and cap, and a pretty lace-trimmed bib apron.’(Fairfax, p.63.) このように通常女性使用人は午前中はプリントのドレス、午後には正式な服装として、黒いドレスを着用したのであった。⁶⁾メンラブは独特な黒いドレスを着て登場する。‘In the hall she met a slender woman wearing a silk dress of that peculiar black which in sunlight proclaims itself to have once seen better days as a brown, and days even better than those as a lavender, green, or blue.’(HE, p.41) ここでのハーディが描く独特な黒はどのような意味があるのだろうか。最終的に黒になったけれども、何回も染め直したことを示唆し

ているのか、光によって様々な色合いを呈する黒なのか。あるいはレディーズメイドの特権として女主人のドレスを譲り受けるということがある。持ち主が代わる度に用途によって染め直されてきたドレスなのだろうか。ここでは、多様な解釈が可能だが、いずれにせよ、当時の女中は午後にはフォーマルな黒を着ることになっていたもので、夜の装いとして適切である。また、メンラブの不良性はオフのときのファッションにまず見てとれる。‘... the speaker, after retiring from duty, had slipped down her dark skirt to reveal a light, puffed, and festooned one, put on a hat and feather, together with several pennyweights of metal in the form of rings, brooches, and earrings...’(HE, pp.41-42) 一日の仕事を終えた後、すばやくデート用の華やかな衣装に着替えるのであった。下級のメイドと違い、レディーズメイドは働いているときもおしゃれな格好をしていたということだが、それでもヴィクトリア朝の人々のメイドの衣服に対する考え方に照らすと、メンラブのオフのときの服装はいささか行き過ぎたものと言わざるをえない。ヴィクトリア朝の人々は使用人が外見から容易に見分けがつく格好でいてほしかったので、休日に分不相応な格好をしているメイドを見つけた女主人は彼女を厳しく叱った。Frank Victor Dawes によれば、キリスト教のパンフレットには服装についての注意があった。

‘You promised at your Confirmation to renounce or give up all the “poms and vanities of this wicked world and all the sinful lusts of the flesh” ... So, Mary Jane, be always well-dressed and thoroughly clean and respectable, but leave earrings, feathers, flounces and bright flowers alone.’(Dawes, p.102) ヴィクトリア朝の人々は使用人が着るべきものとして何が正しくてふさわしいかに対して口うるさくて、女性使用人は完璧に清潔でリスペクタブルな服装をすることを求められ華美な服装を禁じられたのである。⁷⁾メンラブは当時の雇い主が禁止する服装を堂々と身につけているばかりか、彼女の行動にも問題があった。彼女はレディーズメイドとしての服はユニフォームとわりきり、オフの時の派手なファッションは、その不良性の象徴で、彼女のアイデンティティでもある。エセルバータにとってレディーとしてのファッション、労働者階級に属する者としてのファッション、どちらも変装であるのと対照的である。

4. 使用人問題をめぐって

問題ある使用人としては、メンラブが特に目立つ存在ではあるが、使用人に関する悩みは他の従僕など、男性使用人についても言えることが執事としてドンカースル邸で働くチッカレルによってエセルバータへの手紙の中で吐露されている。

I wish I could have a decent footman here with me, but I suppose it is no use trying. It is such men as these that provoke the contempt we get. Well, thank God a few years will see the end of me, for I am growing ashamed of my company—so different as they are to the servants of old times. (HE, p.82, emphasis mine)

本来、「使用人問題」というと、使用人を雇う側が問題ある使用人に対して抱く悩みのことであり、Rosie Cox がその著書、*The Servant Problem :Domestic Employment in a Global Economy* の中で言っているように、『『使用人問題』はイギリスの中産階級および上流階級を悩ませてきた伝統的な悩みの種であり、彼らはたえず、夕食をとりながら、信頼できる使用人を見つけることや保有することの難しさについて議論してきたと考えられていた』のである。(Cox, p.9.) Helen Elisabeth Higson もまた、使用人問題が 19 世紀に人々の多くの関心を占めていたと述べている。使用人に関する手引書の数の多さは使用人問題が雇主にとって重要な課題であり続けたことを例証している。特に、ヒグソンによれば、1871 年以降、使用人の増加率の減少、職場の選択肢の広がり、教育の可能性といった理由から良い使用人がわずかとなり、良い使用人を雇ったり保有するという問題がより重要になってきた。(Higson, p.149)

その意味では、チッカレルは彼自身使用人でありながら、執事という使用人の階級で最上位にあり、他の使用人を管理する立場から、同僚についての悩みを吐露していて、興味深い現象である。しかし、チッカレル自身、無意識のうちに、些細なミスではあるが、使用人としての初歩的なミスを犯していて、雇い主にとっては、彼自身が問題の使用人となっている。第 7 章において、チッカレルはネ

イと叔父のドンカースル氏、そしてジョウンズ氏の会話に登場する。

‘If you had not said otherwise,’ replied Doncastle somewhat warmly, ‘I should have asserted him to be the last man-servant in London to infringe such an elementary rule. If he did so this evening, it is certainly for the first time, and I sincerely hope that no annoyance was caused. (HE, p.78.)

ディナーの際、詩の話をし始めた時、チッカレルの顔が輝くのに気づいたというのである。それはエセルバータの詩の話であった。ネイとジョウンズ氏の指摘を受け、チッカレルの雇い主のドンカースル氏は彼を日ごろ十分に評価しているのだが、雇い主と客の会話に興味を示すこの行為を「初歩的な規則」を破ったものと見なし、客に不快な思いをさせなかったかを懸念している。このことについてはジョウンズ氏によって否定されるが、雇い主、ドンカースルの発言は給仕をする使用人が雇い主たちの会話に興味を示してはならないということが初歩的なルールであるということを明らかにするとともに、支配階級側のこうした認識は当時の上級使用人の、まるで家具のように装飾的役割を持つが、押し黙った、ほとんど見えない存在でなければならぬ実態の反映と捉えることができるだろう。

その後、語り手の視点はチッカレルが働く階下へと移り、彼が関心を示したのは普通の状況ではなかったことや、それだけ抑えがたい感情であったことなどチッカレルの側の事情の説明が付与される。

Any person interested in the matter would have assumed without hesitation that the estimate his employer had given of Chickereel was a true one – more, that not only would the butler under all ordinary circumstances resolutely prevent his face from showing curiosity in an unbecoming way, but that, with the soul of a true gentleman, he would, if necessary, equivocate as readily as the noblest of his betters to remove any stain upon his honour in such trifles. Hence it is apparent that if Chickereel’s countenance really appeared, as Neigh had asserted, full of curiosity with regard to the gossip that was going on, the feelings which led to the exhibition must have been of a very unusual and irrepressible kind. (HE, pp.79-80)

この使用人の事情の代弁者ともとれるような語り手の態度や、雇い主と客の会話が一使用人の問題で終始するといったことが読者にどのような印象を与えたのだろうか。使用人問題というのは使用人を雇うどの家でも厄介な問題であったので、多少の苛立ちを覚えながら読み進めたかもしれない。

結 論

このように、全体としては『エセルバータの手』は現実社会の雇主と使用人の関係性や支配階級の生活についての風刺的色合いが濃い。ヴィクトリア朝において使用人は中産階級のステイタス・シンボルであったため、中産階級と見られたい家庭では金銭的余裕がなくとも、少なくとも一人は雇った。しかし、執事やレディーズメイドがいる屋敷となると、特別である。パメラ・ホーンによれば、彼らは裕福な家にのみいて、レディーズメイドを雇うには少なくとも年収が2000ポンドは必要だった。それより下の年収の家では、ハウスマイドがレディーズメイドの仕事をした。従って、チッカレルやメンラブの登場は第一に、ドンカーズル邸やペサウィン夫人の屋敷がそれだけの経済力を保持する家であることを伝えている。

また、この小説におけるレディーズメイドは上で述べてきたように、主人との親密な関係やメンラブの器用さなど現実の反映と見れる部分も多いが、メンラブは夜遊びと男好きなかなりの問題児として描かれている。現実には、成功しているレディーズメイドは彼女自身がこざれいであり、感じよく話せて、読み書きも優れた人であった上に、行いも良くなければならず、女主人の宝石や衣服を扱うので、絶対に正直であるべきとされた。従って、メンラブはレディーズメイドとしては決して一般的ではなく、かなり危険なメイドであり、脅かす存在として描かれている。ヴィクトリア朝において、メイドを雇う際、家庭の秘密が外に知られることを懸念して、遠い土地から雇ったというので、この小説に描かれるように、使用人というものは、主人の私生活を知っているため、潜在的に主人を脅かす存在ではある。だが、それはあくまで潜在的な脅威であって、通常はただ黙って従うもの、見えない存在でしかない。従って、ハーディは支配階級の悩みの

種である使用人問題を顕在化させ、ヴィクトリア朝の支配階級の潜在的な使用人に対する怖れを具現化させていると言える。

また、使用人の階級出身のエセルバータはレディーへのし上り、使用人を職業とする家族のことや彼女自身のこれまでのいきさつを秘密にしたまま、再婚によって更なる安定へと昇進を遂げることで、階級差を超え、努力が報いられる理想の姿が提示されている。しかし、一方でエセルバータは家族ぐるみで支配階級を欺き、混乱状態に陥れたことになる。彼女の実態と見せかけとの対比をテキストは鮮明にし、彼女の素性を読者に忘れさせない。従って、したたかなエセルバータが素行の悪いメンラブに脅かされ、家族中で慌てふためくというこのプロットは非常にコミカルでありながら、支配階級の読者にとっては、使用人問題、使用人の前景化、さらには、使用人が支配階級の世界を支配する可能性などを突きつけられ、重層的に脅かされるような内容にもなっている。

注

* 本稿は日本ハーディ協会第53回大会（2010年10月30日 於：同志社女子大学）における口頭発表を基に、加筆修正を施したものである。また、本研究遂行にあたっては、平成17年度～18年度科学研究費補助金（基盤研究（C）、課題番号17520179）及び、平成22年度同補助金（課題番号22520250）の助成を受けた。

1) ヴィクトリア朝の読者に関しては、R. K. Webb, *The British Working Class Reader 1790 - 1848: Literacy and Social Tension*, pp.13-35., 及びリチャード・D・オールティック, 『ヴィクトリア朝の人と思想』, pp.69-74.を参照した。労働者階級の一部は本を読んだが、正確にはその数は分かっていない。不十分な教育や労働の必要から、日常生活に必要な読み書きすらできない労働者も多かったと言われている。たとえ読めても、雇い主にコンダクト・ブックの類を渡され読むよう勧められた使用人たちがそうであったように、仕事がつすぎて、目を通すところではないという状況があった。まさに、ほとんどの労働者にとって、「彼らの生活条件はとうてい読書習慣の形成に寄与するものではなかった。」（オールティック, p.71.）知的向上心をもった労働者の一部はゆっくりと、難しい本を読み進めていったが、「大多数の者たちが選択したのは、要求が単純ではあっても貪欲な、読み書きのおぼつかない読者大衆を特に当て込んで書かれた本、雑誌の方」（*ibid.*, p.72.）で、この手の読者に宛てて膨大な数の消化しやすい書籍、新聞が発行された。従って、「今日でも読まれ続けている文学の読者層は、それゆえ中産階級に集中していた。」（*Loc.cit.*）とするオールティックの見解を素直に受け止めて良いのではないだろうか。つまり、使用人を一人でも雇っていることが中産階級のステイタスであった当時の社会において、それは支配階級と呼ばれるものである。

2) ハーディ自身が 1895 年に、この作品について述べている文章—「この小説が初めて世に出た時、それはおそらくもっともなことだったのであるが、こうした意図に含まれたことのために一つまり、とりわけ予想外の性質のために、不評を蒙った—それは批評家の目からすると、許しがたい罪だったのである・・・」からも、発表当時この小説の評価が良くなかったことは伺える。また、彼によると、使用人が主人と同じくらい、いや主人よりも重要であるように描かれていたり、使用人の視点から応接間が描かれていたりといった、この作品において「社会の表面を逆転してみたこと」はその後、読者により歓迎されるようになってきたとのことである。さらに、1912 年に書き加えている文章の中では、「最初の出版の際にはエキセントリックでほとんどありえないと思われた想像上の状況が今では舞台や様々な小説において見られていて、人生の適切で、面白い描写として受け入れられている」とも述べている。

(Thomas Hardy, *The Hand of Ethelberta* ((London: Macmillan, 1975)) pp.31-2., Harold Orel ed., *Thomas Hardy's Personal Writings*, pp.11-2.)

3) ヴィクトリア朝の使用人と紳士の結婚の事例として代表的なものは、Arthur Munby (1828-1910) と Hannah Cullwick (1833-1909) の結婚であるが、upper middle class 出身のマンビーは生涯、ハンナの事を家族や社会に秘密にした。二人の関係性については、拙論、「ヴィクトリア朝のある紳士と雑役女中のロマンス—手とブーツのフェティシズム」(『ヴィクトリア朝文化研究』、第 4 号、2006 年)を参照されたい。

マンビーの日記には、他のケース—召使と結婚した村の司祭の話など—の言及もあり、使用人と結婚した新郎は身内の人々や属する社会から無視されるというのが必然的な結果だった。

4) レディースメイドの任務については、Pamela Horn, *The Rise and Fall of the Victorian Servant*. (London: Sutton Publishing, 1986.) を始めとする使用人に関する研究書、及び、*The Servants Practical Guide* などの当時の手引書(著者不詳)を参照し、拙書、『ヴィクトリア朝における女性の召使いの研究：その衣服、生活、文学表象をめぐって 平成 17 年度～ 18 年度科学研究費補助金(基盤研究 (C)) 研究成果報告書』の第 2 章においても論じている。*The Servants Practical Guide* によると、侍女の休み時間は夜 8 時から寝る時間までで、女主人は侍女に甘く、午後散歩をすることも許されていた。

5) 「メンラブ夫人」という敬称で語られているが、これは女性使用人の上級使用人に与えられた敬称であり、ハウスキーパーなど、未婚であっても夫人という敬称で呼ばれた。ただし、レディースメイドに関しては、他のものと区別して「ミス〇〇」と呼ばれていたという説もある。

6) ヴィクトリア朝の女性使用人の衣服で現存するものはイギリスでも限られた博物館にしかないが、花柄やストライプのコットンプリントのドレスが何点も存在している。無地のドレスもあるが、プリント地のほうが多い。コットン素材のドレスは大抵、下級使用人の午前中の仕事着であり、註 3 で触れた Arthur Munby も、日記において彼の妻、及び他の家の女中の衣服描写においてライラック色のコットンプリントのドレスの言及がある。女中の着替えの習慣はかつてメイドをしていた人の手記においても確認されている。もっとも、午後のフォーマルな服装に着替える必要があったのは、来客の対応をするメイドが主で、一日中、地下の台所にいるメイドには必要がなかったのかもしれない。また、当時の写真は、午前中の服装と思われる格好をした女中たちの中で、上級使用人だけは濃い色のドレスを着用しており、午前中からフォーマルな服装をしていた可能性も示唆している。

7) この他、労働者階級の子供が通った Charity School や Sunday School 向けに書かれた本の一つ、*The*

Servants' Friend (1808) は家庭奉公に出た使用人たちに関する道徳的な説話であるが、女主人の女性使用人の服装に対する見解が示されているばかりか、分不相応な華美な服装をするなど、逸脱した行為の多いメイドが乞食に落ちぶれる過程が鮮明に描かれている。こうした話を通して、当時の子供たちは使用人としての善悪を事前に学んでいった。

Works Cited

Dawes, Frank Victor. *Not in front of the Servants: A True Portrait of Upstairs, Downstairs Life*. London: Century, 1989.

Fairfax, Kay. (ed.) *Mrs Beeton's Household Book*. London: Weidenfeld & Nicolson, 2007.

Hardy, Thomas. *The Hand of Ethelberta*. London: Macmillan, 1975.

Harvey, Geoffrey. *The Complete Critical Guide to Thomas Hardy*. London: Routledge, 2003.

Higson, Helen Elisabeth. *Representations of Nineteenth-Century Female Domestic Servants in Text and Image*. Privately Published PhD. Thesis, University Of London. 1996.

Horn, Pamela. *The Rise and Fall of the Victorian Servant*. London: Sutton Publishing, 1986.

Orel, Harold ed. *Thomas Hardy's Personal Writings*.

Trimmer, Sarah. *The Servant's Friend: An Exemplary Tale Designed to Enforce the Religious Instructions Given at Sunday and Other Charity Schools*. London: n.p., 1808.

The Servants Practical Guide. A Handbook of Duties and Rules. London: Frederick Warne and Co., 1880.

Webb, R. K. *The British Working Class Reader 1790 — 1848 : Literacy and Social Tension*. London: George Allen & Unwin Ltd., 1955.

オールティック、リチャード・D 『ヴィクトリア朝の人と思想』 音羽書房鶴見書店、1998 年。

“We and the Rest of the Country”

— *The Trumpet Major* におけるナショナリズム

土屋 結城

1

Thomas Hardy は『ハーディ伝』の記述によると、幼い頃、クローゼットから祖父が講読していた雑誌 *A History of Wars* を見つけたこと、老兵と多岐に渡る交友関係を築いたこと、ナポレオン戦争の時代を生きてきた祖母から話を聞いたことなどをきっかけにナポレオン及びナポレオン戦争への関心を深めた (*Life* 21-5)。自身の遠縁の親戚にあたり、かつ同名の海軍将校 Thomas Hardy が Nelson 提督の旗艦に艦長として乗り込んでいたこともその関心を加速させるのに一役買ったようである。ハーディが生きていた時代においても、ドーセット南部にはナポレオン侵攻の危機に瀕していた時代の記憶が残っており、土地の住人たちからナポレオン戦争時のさまざまなエピソードを聞くことができた。ナポレオンが密かに上陸し作戦を立てているのを見たという目撃談も残っており、ナポレオンの人形劇などがいまだ演じられていた。¹⁾ ハーディは自身の関心を形にすべく、1878年から1879年頃にかけて大英図書館に通い綿密なリサーチを行い、その成果を *The Trumpet Major* などの作品群に表した。本作品執筆以降もその関心が止むことはなく、それは晩年の *The Dynasts* に結実する。

The Trumpet Major は長らくハーディ作品の中でもやや劣るものと見なされ、後の大作 *The Dynasts* の習作という位置づけで論じられてきた。しかしイギリスのナショナリズムの研究、特に Georg Lukács や Linda Colley が、ナポレオン戦争がイギリスのナショナリズムやナショナル・アイデンティティ形成に多大な影響を及ぼしたという論を展開して以降、この作品も注目されるようになってきた。中でもこの作品をイギリスというネイションの歴史、作中の語り手の言葉を用いるなら “recorded history” (128) と、“unreckoned, unheeded superfluity” (128) と

して生きる人々の “unwritten history” (47) の二項対立に帰する批評が多い。John Goode は、この作品において前者が後者をその無名性のうちに押し流してしまうさまが描かれているとし、結局は “history is absurd” であることが示されていると結論づけており (Goode 66)、Linda M. Shires は作品の構図を “national history / recorded history” と “individual history” の二項対立に帰し、前者が後者に与える影響、衝撃が描かれているという構図を示しながらも、最終的には両者の “juxtaposition” が示されていると論じている (Shires xxviii)。また、近年ではこの二項対立にはよらない解釈も提示されており、亀澤美由紀はナショナリズムとホモソーシャルの議論を結びつけ、イギリスと非イギリスの境界とジェンダーの境界の絡みあいがいかにイギリスのナショナル・アイデンティティの形成過程を反映しているかを論じており、本作品の読解に新たな展開を示した (亀澤 53-69)。本稿はこれらの先行研究を踏まえ、ネイションの歴史と個人の日常生活という二項対立に依拠しつつも、ネイションの歴史が個人に干渉するという従来の読解とは異なる視座からの *The Trumpet Major* の読解を試みたい。

2

ナショナリズムの議論においては、Benedict Anderson が述べるところの “primordial villages of face-to-face contact” (Anderson 6) の範囲にある共同体とネイションとの関係が議論的の一つとなってきた。ナショナリズムの起源をこのような「直接の対面可能性の範囲にある共同体」に求める論者もいれば、ネイションという存在がそのような共同体を逆規定していると論じる者もいる。本稿ではその議論の細部には踏み込まず、以下のことを指摘するにとどめたい。すなわちナショナリズムの議論においては、直接の対面可能性の範囲にある共同体と、その範囲を超える、想像力を必要とする共同体つまりネイションが存在することが前提とされ、その二者の間には何らかの飛躍、ときには葛藤や矛盾が存在するということである。

では、イギリスがナポレオン侵略の危機にさらされた 19 世紀初頭の 1804 年ごろを舞台に、1879-80 年に書かれた *The Trumpet Major* では、ナショナリズムや

ナショナル・アイデンティティの問題はどのように描かれているのだろうか。

まずこの作品の多くの登場人物たちにとって、ネイションや国王がどのように認識されているのかを以下の引用から探りたい。“I wish I wasn’t no more afraid of the French than you be; but being in the Locals, Master Derriman, I assure ye I dream of having to defend *my* country every night; and I don’t like the dream at all.” (emphasis added)²⁾、“Afore I went to church for a pike to defend *my* native country from Boney, . . .” (248, emphasis added)、“‘Thank God, I have seen *my* King!’ said Mrs Garland, when they had all gone by.” (121, emphasis added) これらの引用に見られるように登場人物たちの多くは国を“*my* country”、王を“*my* king”と呼んでいる。これらの“*my*”という所有代名詞から明らかなように、彼らの意識においては、ネイションや国王は個人あるいはせいぜい直接対面する範囲の共同体とのつながりにおいて理解され得るものなのである。その顕著な例がヒロインの Anne Garland であろう。

アンダーソンは、ナショナリズム形成における出版資本主義、特に新聞の重要性について論じた。本作品のアンはと言うと Overcombe の地主 Derriman から新聞をもらい、またある時はデリマンに新聞を読み聞かせることもあり、イギリスの他の地域で起きている出来事について触れる機会がある。しかしアンは新聞のような活字から得られる知識より、顔を合わせた人物から聞く情報の方をより実際的であるとし、そちらの方を重んじている。“Anne would have liked to take [a soldier’s wife] into their own house, so as to acquire some of that practical knowledge of the history of England which the lady possessed, and which could not be got from books.” (52) アンは本、つまり歴史や知識が記録されている媒体より、口承であっても直接対面している者から得られる情報の方を重要視している。この記述からはアンが“unwritten history”の側に立っていることが示される。

さらにその点が明らかになるのが、アンがまさに“recorded history”の一員であるところの国王一行の来訪を見つめる場面である。“Anne now felt herself close to and looking into the stream of recorded history, within whose banks the littlest things are great, and outside which she and the general bulk of the human race were content to

live on as an unreckoned, unheeded superfluity.” (128) この引用からは、国王のような“recorded history”と、アンのような“unreckoned, unheeded superfluity”が対比されている点を読み取れる。

そしてアンは、新聞や活字からネイションという共同体を想像することができずにいる。アンが教会で説教を聴く場面がある。そこでの彼女の様子は以下のように描写されている。“The sermon, too, was on the subject of patriotism; so that when they came out she began to harp uneasily upon the probability of their all being driven from their homes. . . .” (207) この文中にある“patriotism”と“nationalism”の違いについてはさまざまな議論がなされているが、前者は自分の土地への愛着、後者は想像を必要とする意識との区別がなされることが多いようである。³⁾ 本作品ではその違いは必ずしも明確にはなっていないが、アンにとっての“patriotism”は先に示した区別の通り、見ず知らずの者たちとの連帯ではなく、自分たちの土地及びそこに住む者への愛着を意味していることが明らかであろう。つまりアンは身近にいる者との連帯を感じてはいるものの、大きな共同体を想像し、それと連帯、同化しているわけではない。

3

一方でアンはイングランドの象徴という役目も負っている。アンの父は風景画家で、アン自身もその作品をコピーすることがある。この点は、アンがイングランドの風景の継承者であることを示しているようでもある。そしてこのイングランドの象徴という役割は、ナポレオンの象徴あるいはパロディととらえられている Festus Derriman との比較においてより明確になる。デリマンはフェスタスをナポレオンと同等の存在と考えている。

“Miller, what with the French, and what with my nephew Festus, I assure ’ee my life is nothing but wherit from morning to night. . . . Well, I’ve come to ask a favour – to ask if you will take charge of my few poor title-deeds and documents and suchlike, while I am away from home next week, lest anything should befall me, and they should be stole away by Boney or Festus, . . .” (135).

“what with the French, and what with my nephew Festus” という表現やあるいは “Boney or Festus” といった表現からは、デリマンの意識においては、フェスタスもナポレオンも自らの財産を脅かすものであるという点において同等の、いわば交換可能な存在であると見なされていることがわかる。そして、フェスタスがナポレオン上陸の誤報により羊飼いの小屋に逃げたアンを脅かし、剣で窓をこじ開けようとしながらもその企てが頓挫するさまが描かれた場面においては、アンをイギリスの表象、フェスタスをナポレオンの表象と見なすことができる。“unwritten history” の二人が “recorded history” を体現しているのである。

小説の最後でアンが Oxwell Hall というデリマンの邸宅を相続することになるという出来事もこの観点から捉えなおすことができよう。オックスウェル邸は “The hall was as interesting as mansions in a state of declension usually are, as the excellent county history showed.” (74) とあるように “the excellent county history” に記録されているという設定になっている。アンが自らも知らぬうちにオックスウェル邸の相続者となっていたさまは、そうとは意識せずともイングランドの象徴、或いは継承者の役割を付与されている点とも合致するようである。

アンについてはいまひとつ重要な場面がある。国王ジョージ3世との邂逅である。この場面でアンは王から戦場に赴いた恋人の名を聞かれ、“In spite of Anne’s confusion and low spirits, her womanly shrewdness told her at once that no harm could be done by revealing Bob’s name; and she answered, ‘His name is Robert Loveday, sir.’” (295) と反応する。この場面は、アンが自分とは交わることがないと思っていた “the stream of recorded history” であるところの国王と接触しただけでなく、それに積極的に働きかけているさまを描写している。この邂逅が後のロバートの昇進につながったと考えることも可能であり、そうであるならばなおさらアンがこの行動の影響は大きい。国王とアンが出会ったのは偶然だが、ロバートの名を出したのは自らの積極性による。アンは確かにネイションという共同体を想像できずにいるが、自らも気付かぬうちにナショナルな歴史を体現し、さらにはそれと接触し、働きかけもするのである。

では Wessex というイギリスの中心から離れた地で “unwritten history” と “recorded history” が接触/交錯することにはどのような意味があるのだろうか。本作とほぼ同時代に書かれた、フランス革命とナポレオンについての歴史書、William O’Connor Morris の *The French Revolution and First Empire: An Historical Sketch* の中に、以下のような分析がある。

What saved England was not the defense of the Channel, which was left too feeble guarded, but the terror of her fleets, and the demoralization of her foes. . . . We believe, however, that he [Napoleon] entirely underrated the resistance which he would have to encounter had he succeeded in making the descent; the English army was of considerable strength; and on this, as on other occasions, he unduly disregarded the enormous power of national forces under certain conditions. *He might have captured London, but he would, we think, have been ultimately imprisoned within his conquest.* (Morris 208-9, emphasis added)

ここでモリスはナポレオンはロンドンを陥落したかもしれないが、最終的には捕えられていたであろう、とナポレオンのイギリス上陸作戦についての記述を締めくくっている。

作品においても、語り手が “it was sometimes recollected that England was the only European country which had not succumbed to the mighty little man who was less than human in feeling, and more than human in will” (220) と述べる場面があるが、その表現からも、モリスの記述に見られるような自信が垣間見える。1880年代の読者はナポレオンが上陸しなかったことを知っており、その上陸作戦が頓挫した理由もモリスの言葉によれば “the terror of her [Britain’s] fleets, and the demoralization of her foes” に因るものであると分析されていた。モリスも語り手も、ナポレオン戦争についての知識は十分に持っている上、もしナポレオンが上陸したとしてもその作戦は成功しなかったであろうという自信を共有している。擬似的にナポレオンの役割を果たすフェスタス・デリマンとアンのエピソードはその自信の具現化と言える。

しかしモリスと語り手はウェセックスの位置づけにおいて異なる立場をとる。モリスの意識はロンドンに向いているのに対し、この小説はあくまでもウェセックスに焦点が当てられている。オーバークームの人びとは、ジョージ3世の来訪を記念して丘にジョージ3世の絵を刻んだり(317)、ジョージ3世が帰郷するときには花火を打ち上げたりする(331)。特に丘の絵の製作年は実際と異なる年に設定され、作中ではトラファルガー海戦の勝利を記念して製作されており、ジョンとアンがその製作現場に立ち会うことができる。⁴⁾ これらの絵や花火は、ジョージ3世の来訪をこの地域の共有の記憶として残していこうとする行為であり、それらの行為によりウェセックスがイギリスというネーションの一部であることが、人々の記憶のみならず土地にも刻み込まれることになる。本作品におけるナポレオン戦争とは、単にイングランドが優れている国であることを示した機会であるに止まらず、ウェセックスがイギリスというネーションを支える重要な一部であることが確認された、記憶 / 記録すべき歴史であり、ウェセックスの記憶がネーションの記録に残されることになる。この戦争によりウェセックスの“unwritten history”は“recorded history”へ転換するのである。

この転換は Robert の描写からも読み取れる。ロバートは義勇軍に加わろうと決意した後、プレス・ギャングと呼ばれる水兵強制徴募隊の急襲を受けるが、必死に抵抗しこれを免れる。しかしその後、自らの愛国者としての立場に自信がもてなくなり、同じ村出身のトマス・ハーディ海軍将校が近くに滞在していると聞くや否や彼のもとをたずね、ネルソン提督の旗船に乗船することになる。プレス・ギャングの急襲と彼の決意との間には他にも経緯があるが、結果的にロバートはプレス・ギャングに連れ去られるよりも、既に名を挙げており、ナショナルな歴史の側にいるネルソンやハーディ将校とともに戦うほうを選ぶのである。

この“unwritten history”と“recorded history”の交錯の先には何があるのだろうか。それを探るために、長い引用になるが、ナポレオン上陸を知らせるのろしが上がった夜の描写を見てみたい。

Their [Bob and Loveday] excitement was merely of a piece with that of all men at

this critical juncture. Everywhere expectation was at fever heat. For the last year or two only five-and-twenty miles of shallow water had divided quiet English homesteads from an enemy's army of a hundred and fifty thousand men. *We* had taken the matter lightly enough, eating and drinking as in the days of Noe, and singing satires without end. *We* punned on Buonaparte and his gunboats, chalked his effigy on stage-coaches, and published the same in prints. Still, between these bursts of hilarity, it was sometimes recollected that England was the only European country which had not succumbed to the mighty little man who was less than human in feeling, and more than human in will; that *our* spirit for resistance was greater than *our* strength; and that the Channel was often calm. . . .

The English watched Buonaparte in these preparations, and Buonaparte watched the English. At the distance of Boulogne details were lost, but *we* were impressed on fine days by the novel sight of a huge army moving and twinkling like a school of mackerel under the rays of the sun. The regular way of passing an afternoon in *the coast towns* was to stroll up to the signal posts and chat with the lieutenant on duty there about the latest inimical object seen at sea. (220-1, emphasis added)

この引用部分の出だしでは語り手は登場人物2人、ロバートとその父 Loveday に焦点をあてているが、そこから“everywhere”と視点が俯瞰的になる。そして途中から人称代名詞“we”を用いる。この“we”は例えば、当時の事態を軽く考え、風刺の歌を歌ったり、ナポレオンを茶化し、ナポレオンの絵を馱馬車に描いたりし、さらにはそれを印刷したりしている。そして晴れた日には遠くの海上にいる海軍の動きを見、感銘を受けたり、海岸の町で見張りについている海軍中尉と敵軍の船影についての言葉を交わしたりしている。これらの描写から、この“we”が1804年当時の人びとを指していることは疑いようがなく、さらにその行動が多岐に渡り、出沒する地域についても“the coast towns”と複数形が使用されていることから、オーバークームの構成員だけを指しているわけではないことが伺える。つまり、この“we”はナポレオンを監視していたと述べられる“The English”を受けていると考えられる。語り手は、時間、空間を越えて過去のイギリス人と同化しているのである。この空間的な範囲はブリテンではなく、イングランドのみを指しているようだが、それでも語り手は、直接対面する範囲より大

きな共同体を想像し、それに同化しているのである。ここには、アンのような登場人物たちとは違い、ネイションという共同体を想像している、そして想像できている語り手がいる。

語り手のこの“we”の意識に近づくのがロバートである。彼は、オーバークームで義勇兵募集の張り紙を見て、すぐさまそれに加わろうと考える。その動機として次のように語る。“For these three years we and the rest of the country have been in fear of the enemy: trade has been hindered; poor folk made hungry; and many rich folk made poor.” (284) このように語るロバートの意識にはその想像された共同体があることが読み取れる。ロバートは“we and the rest of the country”と表現しており、語り手に比べれば“we”の範囲が狭いが、“the rest of the country”を視野に入れている点、特に自らの階級ではない“poor folk”と“many rich”を視野に入れている点で、やはり大きな共同体を想像しているといえよう。

そもそも現実の義勇兵募集の貼り紙を参照したとされる作中の貼り紙そのものが、直接対面する共同体を守るのみの意識からネイションへの愛国心を喚起すべく巧みに書かれている。⁵⁾

You will find your best Recompense in having done your Duty to your King and Country by driving back or destroying your old and implacable enemy, envious of your Freedom and Happiness, and therefore seeking to destroy them; in having protected your Wives and Children from Death, or worse than Death, which will follow the Success of such Inveterate Foes.

ROUSE, therefore, and unite as one man in the best of causes! United we may defy the World to conquer us; but Victory will never belong to those who are slothful and unprepared. (203)

この貼り紙は“you”という、個人も共同体をも指示することができる代名詞を用いて呼びかけており、“you”への呼びかけとなった時点で、対象が個人なのか共同体なのかがあいまいになる。そして、国王という可視的な存在を媒介とすることにより、自分の妻や子という対面可能な範囲の共同体を守る意識とネイショ

ンを守る意識とをつないでいる。そして最終的にはネイションの一員としての責任を果たすように訴えているのである。ロバートがアンを思い、彼女をオーバークームに置いていくことにためらいを感じつつも、結局はネイションへの責務から志願することになる心の動きはこの貼り紙のレトリックと一致する。

そしてこの意識がアンを手に入れるための努力を以下のように評するロバートの最後の言葉へとつながる。“After a coaxing that would have been enough to win three ordinary Englishwomen, five French, and ten Mulotters, she has to-day agreed to bestow her hand upon me at the end of six months.” (344) この言葉は亀澤氏の指摘にあるように、「女性の価値の国境と人種による序列化」、つまり「その最高位にイギリス人女性を置く。フランス人を見下し、さらにスペイン系混血を最下位に据える」という「大英帝国の外国に対する視線と一致」する(亀澤 63-4)。このように話すロバートの意識はナショナリズムのみならず、帝国主義的な視線をも内面化させていると言えよう。

5

本作では最終的にはこのようなロバート的なナショナリズム、すなわちネイションを想像し、帝国主義をも内面化させているロバートの生き方が正当化されているように見える。小説の最後では、アンがロバートのプロポーズを受けたことが明かされるが、イングランドの象徴及び継承者の側面を持つアンとロバートが結婚するという事は、二人がイングランドをフェスタスつまりナポレオンから守ったと同時に、“unwritten history”の側から抜け出て“recorded history”と一体化するナショナリズムを選択したことを暗示している。

ロバートとアンとは対照的にナショナルな歴史に名を残すことができなかったジョンは名もなき存在、まさに“unreckoned, unheeded superfluity”として異国の地で亡くなる。彼の最期は“he . . . went off to blow his trumpet till silenced for ever upon one of the bloody battle-fields of Spain” (344)と描写される。彼が戦死する場所は“one of the . . . battle-fields”と具体的に特定されず、その存在は多くの戦死者の中に埋没してしまう。また“silenced”という表現からはもはや歴史に名

を残す可能性が奪われてしまったことが伺える。ロバートとジョンを比較すると、ジョンの生き方は報われないものとして描かれ、ロバートの生き方が賞賛されているように見える。

しかし、ハーディの他の作品ではロバートのように広い世界を見聞し、ネイションという共同体を想像できるようになった人物が必ずしも肯定的には描かれていない。前作 *The Return of the Native* に登場する Grandfer Cantle は義勇兵として従軍したからか、自分がより大きな共同体の一部であるという認識は持っているようだが、その従軍経験も他の村人たちからは “Couldst sign the book no doubt” (26) と軽んじられている。ロバートとはいうと、小説に登場したときにはマチルダという女性と婚約しており、その後はアンに思いを寄せ、しかしその後いつとき別の女性に心を奪われ、最後はまたアンの下に戻ってくる、という心変わりしやすい男性で、作中では風見鶏にたとえられるような軽率なところのある男性である。そもそもの従軍のきっかけも粉屋の生活からの逃避という願望や、アンをめぐるジョンとの関係の影響があった事実は否めない。貼り紙を見たときもその心の動きが描かれることはなく、“We and the rest of the country” に言及したロバートの決意も、貼り紙のレトリックを無批判に内面化しただけとも言え、いささか軽率な印象を与える。

ロバートと対照的なジョンにしても、ただ単に名もなきものとして生き死んでいった取るに足らない存在として一顧だにされていないわけではない。オックスウェル邸が “the excellent county history” (74) に記されていると説明されただりからは、本作では、史実上の出来事も、小説上史実とされる出来事も同等の現実性及び重要性を持って扱われていることがわかる。⁶⁾ そのように、架空の記録書に記されているオックスウェル邸がジョージ3世やネルソン提督と同様のリアリティを持っているならば、虚構の産物といえども小説に記されること自体も記録に残る行為であり、その意味において *The Trumpet Major* という小説に記されたジョンの人生も “recorded history” となり得る。たとえば *The Dynasts* には、ジョンは含まれないものの、前述したキャントル爺さんやロバートが直接、あるいは間接的に登場する。(*Dynasts* 1, 2, 5; 1, 5, 7; 3, 5, 6) 彼らの存在がウェセックス

の人々の記憶に、そしてウェセックスの歴史に記録されているということの証左である。

以上のことから次のように考えられる。ロバートとジョンを比較するとロバートの人生のほうが称揚されているようであるが、しかし作者の意図は実はジョンのような者の人生を掬い取ることにあり、ロバートのような者を批判する視点が内在しているということである。ただしジョンの人生が正当化されていると言えるのは、彼の人生が “recorded history” になったからである点を慎重に検討する必要がある。小説に描かれた時点ですべては記録されたものになり、その意味においては、“recorded history” にならないまま終わる者はいない。“unwritten history” を掬いあげようと小説に記すことは、全てを “recorded history” にすることに他ならない。この見方からすると “unwritten history” と “recorded history” の対立は作者の書くという行為そのものによって全てが “recorded” になるという形で解消されることになる。

小説 *The Trumpet Major* における “recorded history” と “unwritten history” の対立は、プロットに沿って考えるならば、前者が後者に接触してだけでなく、後者が前者に接触していくという流れもあり、それらが “we” という代名詞の中で一体化することにより解消されると結論づけることができる。しかし書くという行為をも視野に入れるのならば、虚実混じった世界の中で “recorded history” と “unwritten history” の別は結局すべて “recorded history” となってしまう。小説という媒体自体が記録するという性質、換言すれば “recorded history” となることを希求する力を持っており、その力に作品自体が影響され、押し流されると言えるのかもしれない。

注

* 本稿は日本英文学会第81回全国大会(2009年5月31日 於:東京大学駒場キャンパス)における口頭発表原稿に加筆・修正したものである。

1) Ruth A. Firor, *Folkways in Thomas Hardy* (New York: A. S. Barnes and Company Inc., 1962) 299-302に詳しい。

2) Thomas Hardy, *The Trumpet Major: John Loveday A Soldier in the War with Buonaparte and Robert his*

Brother First Mate in the Merchant Service, A Tale. (1880. London: Macmillan, 1978), 81.以下この小説からの引用はこの版に拠り、本文中に括弧内でページ数を示す。

3) “nationalism”と“patriotism”の違いについて、Liah Greenfeldは*Encyclopedia of Nationalism*の中で、前者が「ナショナル・アイデンティティ（或いはナショナルリティ）やネイションへの帰属意識、及びネイションに関連する現象を含む包括的な用語」であり、狭義では“national consciousness”と同意であるとし、後者を「国、つまり父祖の土地を愛すること」の意であり「自らが帰属する共同体がネイションであろうとなかろうと存在する自然な感情」であると説明している(255)。また Steven Grosbyは“patriotism”を「土地に忠誠心を持つこと」と定義づけることを提案し、“nationalism”については「世界を自らの故国であるネイションとそれ以外のネイションの二つに分け、後者が決して相容れることのできない敵だと思えるとき、patriotismとは対照的な nationalism のイデオロギーが生まれる」と説明している(16-7)。

4) シャイアーズの注によれば、王の像が制作されたのは 1808 年、ジョンとアンが丘を歩いた翌年である(Shires 327)。Kate Bergamar, *Discovering Hill figures*には 1808 年の *The Universal Magazine* の以下の記述が引用されている。“An equestrian figure of His Majesty has lately been formed in the chalk on Osmington Hill, opposite the Bay of Weymouth.” (28)

5) ハーディは序文で“the ‘Address to all Ranks and Descriptions of Englishmen’ was transcribed from an original copy in a local museum.” (37)と述べている。

6) オックスウェル邸についての記述がある“the excellent county history”とは John Hutchins の *The History and Antiquities of the County of Dorset* を指していると推測されているが、実際の書にはオックスウェル邸と一致する記述はない。すなわち、本作の“the excellent county history”は厳密には架空のものである。

Works Cited

- Anderson, Benedict. *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*. 1983. London: Verso, 2006.
- Bergamar, Kate. *Discovering Hill Figures: White Horses and Other Creatures of the Downs, their History, Location and Legends*. Oxford: Shire Publications, 2008.
- Firor, Ruth A. *Folkways in Thomas Hardy*. New York: A. S. Barnes and Company Inc., 1962.
- Goode, John. *Thomas Hardy: The Offensive Truth*. Oxford: Basil Blackwell, 1988.
- Greenfeld, Liah. “Etymology, Definitions, Types.” *Encyclopedia of Nationalism*. Ed. Alexander J. Motyl. 2 Vols. San Diego: Academic P., 2001. 251-65.
- Grosby, Steven. *Nationalism: A Very Short Introduction*. Oxford: Oxford U. P., 2005.
- Hardy, Thomas. *The Life and Work of Thomas Hardy*. Ed. Michael Millgate, London: Macmillan, 1984.
- . *The Dynasts: An Epic-Drama of the War with Napoleon*. Ed. Harold Orel. London: Macmillan, 1978.
- . *The Return of the Native*. 1878. London: Penguin, 1999
- . *The Trumpet Major: John Loveday A Soldier in the War with Buonaparte and Robert his Brother First Mate*

in the Merchant Service, A Tale. 1880. London: Macmillan, 1978.

Hutchins, John. *The History and Antiquities of the County of Dorset*. Ed. W. Snipp and J. W. Hudson. Wakefield: EP Pub. in collaboration with Dorset County Library, 1973.

Morris, William O'Connor. *The French Revolution and First Empire: An Historical Sketch*. New York: Charles Scribner's Sons, 1892.

Shires, Linda M, ed. *The Trumpet Major: A Tale*. By Thomas Hardy. 1880. London: Penguin, 1997.

亀澤美由紀『『ラッパ隊長』—イギリス国民誕生の物語』日本ハーディ協会会報『ハーディ研究』第 34号(2008) 53-69.

詩に描かれた生き物・時・人間に関する 「多様な読み」から垣間見るハーディ像

渡 千 鶴 子

I

トマス・ハーディ (Thomas Hardy) が、『日陰者ジュード』(Jude the Obscure) の後、小説から転じて詩作にかけようとしたことは、『トマス・ハーディの生涯』(The Life of Thomas Hardy) に記載された下記から明らかである。

‘Poetry. Perhaps I can express more fully in verse ideas and emotions which run counter to the inert crystallized opinion — hard as a rock — which the vast body of men have vested interests in supporting...’¹⁾

しかしリーヴィス (F. R. Leavis) は、『サザン・レビュー』誌 (The Southern Review) で、「ロマンチックな詩的言語、陳腐な散文調、誇張表現、口語体や古語、知識欲にとらわれた技法、土着の方言、ハーディ特有の新語」²⁾などを批判した。またアービング・ハウ (Irving Howe) は、「まるで複雑な表現形態を苦心して練り上げることが、価値あることだと考えているようだ」³⁾と非難している。一方ルイス (C. Day Lewis) は、「ハーディの詩には、偉大な詩人だけがなし得る幅広い素材と作風がある」⁴⁾と言い、オーデン (W.H.Auden) は、「ハーディには鷹の目がある。『霸王たち』の舞台や『帰郷』の第1章のように、とてつもない高所から人生を俯瞰するその眺め方に、私は最も価値を置いている。単にその時代その地方の社会生活だけでなく、人間の歴史全体、地球上の生命、星の関連から個々の人生を考えることは、我々に謙虚さと自信の双方を与えてくれるのだ」⁵⁾と擁護している。リーヴィスの指摘するさまざまな語、表現、技法、またオーデンの主張する広範囲に及ぶ内容は、一言で言えば多様性に繋がる。

ハーディは、第2詩集『過去と現在の詩』(Poems of the Past and the Present) の序文に次のように書いて、読者に多様な読みを期待している。

Moreover, that portion which may be regarded as individual comprises a series of feelings and fancies written down in widely differing moods and circumstances, and at various dates. It will probably be found, therefore, to possess little cohesion of thought or harmony of colouring. I do not greatly regret this. Unadjusted impressions have their value, and the road to a true philosophy of life seems to lie in humbly recording diverse readings of its phenomena as they are forced upon us by chance and change.⁶⁾

第3詩集『時の笑い草とその他の詩』(Time's Laughingstocks and Other Verses) の序文には、下記のように記している。

... but the sense of disconnection, particularly in respect of those lyrics penned in the first person, will be immaterial when it is borne in mind that they are to be regarded, in the main, as dramatic monologues by different characters.

これらは我々読者への断り書きだと読める。我々読者は、詩集として出版する限りは、統一だった調和と一貫性を前提とするからだ。このことをハーディは意識して序文に書き記したのではないだろうか。読者が、一貫性や調和を求めることをハーディは承知した上でそれでもなおかつ、それよりも多様な読みを記録することに重点を置いていることを、ハーディは序文で明示したのだ。本稿では、第1詩集『ウェセックス詩集とその他の詩』(Wessex Poems and Other Verses)、第2詩集、第3詩集からそれぞれ1編ずつ詩を考察して、多様な読みが読み込まれていることを確認し、その結果、見えてくるハーディ像を探ることを主眼とする。

II

まず、「8月の真夜中」(“An August Midnight”)を取り上げて、どのような多様性が描かれているのかを一考してみよう。

A SHADED lamp and a waving blind,
And the beat of a clock from a distant floor:
On this scene enter – winged, horned, and spined –
A longlegs, a moth, and a dumbledore;
While 'mid my page there idly stands
A sleepy fly, that rubs its hands ... (1-6)

Thus meet we five, in this still place,
At this point of time, at this point in space.
– My guests besmear my new-penned line,
Or bang at the lamp and fall supine.
'God's humblest, they!' I muse. Yet why?
They know Earth-secrets that know not I. (7-12)

ジェイムズ・ギブソン (James Gibson) は、「第2スタンザでわかるように、この詩にはより深い認識の始まりがある。第1スタンザの単なる叙述が、第2スタンザではもっと意義深いものへと高められている。……我々人間にはわからないが、卑しい彼らは、確かな存在の領域があることを本能的に知っているのだから、ハーディは彼らを尊敬している」⁷⁾と主張する。マイケル・アレグザンダー (Michael Alexander) は、「最後の黙想は、慣れない読者には簡潔化されすぎていると思えたり、あるいは物事をわきまえた読者には、気取っていて病気ではないかと思えたりするかもしれない。しかしハーディは『調整されていない印象にも価値はある』と信じているので、この黙想には劇的な一致がある」⁸⁾と論じている。

この詩を身体的な特性に基づく表現である感覚表現に置き換えて読んでみる。スティーブン・ウルマン (Stephen Ullmann)⁹⁾ やジョセフ・ウィリアムズ (Joseph M. Williams)¹⁰⁾ によると、「視覚や聴覚は高等な感覚で触覚は下等な感覚である。」第1スタンザの私の所有する「ランプ」、「ブラインド」、時計の「音」、「書 (字句)」は視覚や聴覚の表現である。他の4者の所有するもの、つまり「羽」、「触角」、「針」、「手」は触覚を示している。「ねむそうな」は、視覚の欠如を表す。第2スタンザを内容から理解すると、視覚を示す「書」を触覚で「汚し」は、高

等な領域である活字が理解できないことを示唆する。視覚である「ランプ」に触覚で「ぶつかり、倒れる」のは、高等な領域に挑んでも、負け戦であると読める。しかし今言及したこの視点こそ、「私」という高等な感覚を持った「もの」の傲慢な判断に過ぎない。なぜなら最後の2行で、高等な存在であれば知っているはずのこと、すなわち「地球の神秘がわからない」ではないかと詠っているからだ。¹¹⁾ ハーディはすべての生き物、生命はこの世、この舞台においては平等であると考えていたからこそ、この最後の2行を書き記したのだ。ハーディが人間と昆虫を同じ舞台上に上げたことは視点の多様性である。この多様な視点に、ハーディの人間への冷徹な目と昆虫への優しさがこめられていることは明白である。

ハーディは、人間も生き物も共存して生きていかねばならないことを詠っている。生き物と人間との関わりが、地球を守る上では必須の課題であることを「国際生物多様性年」¹²⁾ である昨年、我々は強く感じたはずである。ハーディは今我々が直面している問題を、1世紀も前に予測していたのだ。ジュード (Jude) が「世の中は、僕たちと同じ試みに照らし合わせてものを考えているわけがないのだ。僕たちがパイオニアであるなんてよくも思ったものだ！」¹³⁾ と嘆くが、時代に先んじた考えは、世の中とは相容れない。先に引用したアレグザンダーの言葉を借りれば、「最後の黙想は気取っていて病気ではないかと思える」のだ。

III

「フェニックス・インでのダンス」 (“The Dance at the Phoenix”)¹⁴⁾ に移ろう。

全体の要約をすると、ヒロインの名前はジェニーで、ジェニーの結婚前の生活は、兵士たちと毎晩のように踊り明かすという乱れた生活であった。しかし真面目な男性と結婚してからは、良妻賢母に徹するようになる。だが60歳近くになったある夜、音楽に呼び起こされて、若い頃が蘇る。彼女は過去に引き戻されて、家を抜け出してフェニックス・インへ行き、兵士との踊りに夢中になる。朝が近づき、今度は現在に引き戻されて、夫の眠っているそばに帰ってくるが、そのまま息を引き取るというバラード風の物語詩である。

予告も前兆もなしに、瞬時に約40年の時間移動が起こる。ジェニーはタイム

マシーンに乗ったかのように、一瞬にして過去の時間を過ごし、また一瞬にして、現在の時間に舞い戻る。つまり彼女の中では、2つの世界、現在と過去が混在する。この混在ゆえに彼女は生き生きと生きている。しかしこの混在が消滅すると、彼女の生気も失われ、息を絶つ。「時」は過去から現在そして未来へと流れるものであることや、現在から過去へフラッシュバックする「時」を念頭に置くと、現在と過去の混在は「時」の多様な捉え方と考えられる。

ここで“maze”を“the diachronic process of the years”と把握しているデニス・テイラー (Dennis Taylor) の説を取り上げてみたい。テイラーは、ハーディの語呂合わせ (“pun”) の特徴を示すために、「ある踊り手の回想」 (“Reminiscences of a Dancing Man”) を引用し、“maze”に言及して「時」として捉えている。

Hardy’s historical sense means that his puns not only display synchronic wit but also are often rooted in different historical moments, as in ‘Reminiscences of a Dancing Man’:

The *fancied* phantoms stood around,
Or joined us in the *maze*,
Of the *powdered* Dears from Georgian years

(i. 266)

The ‘maze’ is not only the synchronic system of the dance pattern; it is also the diachronic process of the years. In the dance maze, the ‘dears’ are ‘powdered’ with rouge; in the maze of the years, they are ‘powdered’ with grave dust.¹⁵⁾

この詩に描かれた“maze”で表された「時」は、「フェニックス・インでのダンス」のような、熟年のまま過去へタイムスリップするといった「時」の混在ではない。この詩では、男性が若かりし頃を回想し、その回想の中にもう一つ古い「時」が存在している。その古い「時 (代)」の人々が、男性が回想する若い頃の「時」へ、幻影となって訪れるのである。

テイラーが、“maze”を「時」として捉えた上に、“In the dance maze”でもあると述べて、語呂合わせしているのは興味深い。なぜなら「フェニックス・インでのダンス」の第13スタンザ “They seized and whirled her mid the maze, / And Jenny

felt as in the days / Of her immodesty.” (89 – 91) と似ているからだ。“maze”はOEDによると、「ダンスのくるくる回る動き」 (“A winding movement, esp. in dance”) である。ジュニーも若き乙女に変身したかのように、くるくる回る踊りに酔いしれているのだ。また“maze”の語意である「混乱、当惑」から、兵士たちが彼女をダンスで回転させたので、年を取った彼女は目が回り「混乱」し、かつダンスをしていることで「当惑」もしていると読める。

続けて語呂合わせになっており、かつ「時」の混在を呈示している箇所 (第17スタンザ) を抜き出すと、

Her nine-and-fifty years came back;
She sank upon her knee
Beside the durn, and like a dart
A something arrowed through her heart
In shoots of agony. (115 – 119)

「彼女の心に苦悶の矢となり、あるものが突き刺さった」は、精神的なものと肉体的なものを掛けている。すなわち、精神的には夫の下を抜け出して、若い頃のように踊り明かしたことに対する良心の咎め、罪の意識を意味する。肉体的には年齢を考えずに踊りに夢中になったために、身体に支障がおきた心臓麻痺や心筋梗塞といった心不全であろう。

もう1箇所 (第22スタンザ) は、

When told that some too mighty strain
For one so many-yeared
Had burst her bosom’s master-vein,
His doubts remained unstirred. (148 – 151)

「ある強すぎる緊張」は、長年の気概つまりは家庭での良妻賢母であろうと努力しすぎた「無理な緊張」と、もう一つはフェニックス・インでのダンス音楽、つ

まり「旋律」(“strain”)が年を重ねた彼女には「強すぎた」ことを示す。第17スタンザと第22スタンザのこの二つの語呂合わせは、現在と過去の「時」の混在の中では、まるで日頃のストレスを発散するかのように生き生きと生きている彼女と、現在という「時」の中では、無理をして生きている彼女を象徴している。このような「時」の混在の中で自由に動き回る主人公を描いたことに、「時」に対する認識の強いハーディ像が浮かび上がる。

ヴィクトリア朝時代の女性たちには、家庭の天使であることが望まれていた。ジェニーは努力するが、重荷であったのだ。それゆえ娘の頃に戻って楽しみたくなった。彼女は、「時」を越えたところ、すなわち「時」の混在するところではか生きることができずに、現実に戻ると同時に生命を終える。ハーディは、良妻賢母という価値観に縛られて生きなければならなかったジェニーへの哀れさを表現している。鋳型に嵌った生き方を求められた女性への愛惜を詠った詩である。因習的な価値観へのハーディの反発の一端を垣間見ることができる。

IV

最後に、第1詩集、第2詩集、第3詩集の中で最も長くスタンザがなく222行からなる「パンシラ」(“Panthera”)の論を展開する前に、「ある日曜の朝の悲劇」(“A Sunday Morning Tragedy”)を見ておこう。

身籠った娘の母親が、娘の相手である男性に結婚してほしいと懇願するが、断られ、娘を不憫に思って、羊飼いかから墮胎薬を手に入れ、娘に飲ませる。すると娘は重病に陥って胎児と共に帰らぬ人となる。これが梗概である。

「出生が呪いになりうる世界に生きているという痛ましいまでにばかげたことに、この母は気づいている」¹⁶⁾というポール・ツィートロウ(Paul Zietlow)の論を俟たず、未婚で妊娠した場合は、正道からの逸脱である。この胎児は亡くなるが、生を受けていたら非嫡出子になる。ハーディが非嫡出子を詠んだ詩の例として、通りがかった男性にレイプされて妊娠する「黒い瞳の紳士」(“The Dark-Eyed Gentleman”)、結婚できずに子どもを生んでその後その子と共に死ぬ「ジュリー・ジェイン」(“Julie-Jane”)、妻が夫の子どもを妊娠した女中を許す「妻ともう一

人の者」(“A Wife and Another”)などがある。これらの詩から、ハーディが非嫡出子に関心を寄せていた一面が窺われる。だがこれらは女性の立場や心理に光が当たっていて、子どもや男性は二義的な存在である。

そこで、非嫡出子とその父が主人公になる詩「パンシラ」(“Panthera”)に注目したい。

言及する箇所を要約すると、語り手は法律上の権利を持たなくてもいいので子どもがほしいとパンシラ(非嫡出子の父親)に話す。するとパンシラはそれはやめておけとってその訳を話し出す。話の内容は、パンシラが若くて歩兵中隊の副隊長であった時、ナザレで知り合った女性と関係を持つが、仕事のためにその場を離れ、その女性とは別れる。実は彼女は妊娠してしまっていた。身籠ったまま彼女はある年を取った男性と出会う。その男性は彼女を哀れに思って、彼女と結婚してその子を育て上げる。パンシラが彼女と別れてから約30年後、死刑執行の場として有名なゴルゴダで、パンシラは偶然彼女を見つける。彼女がその場にいた理由は、彼女の息子すなわちパンシラとの間にできた子どもが、その日処刑されることになっていたからである。

アルバート・ゲラード(Albert J. Guerard)は、『パンシラ』は劇的独白で、ブラウニングに見られるような歴史的観点からの再構築がある。しかしブラウニング程、奇抜ではないし、落ち着いたリアリズムがある¹⁷⁾と論じている。ランス・バトラー(Lance St. John Butler)は、「もっぱらキリストの父性を扱っているが、メアリに対する愛を感動的に描いている」¹⁸⁾と主張している。ノーマン・ページ(Norman Page)は、『パンシラ』や『たぎぎの火』(“The Wood Fire”)のような詩は、これまで慣習として受け入れてきた聖書に基づく真実性を揺るがして、論争へと発展させる詩だ¹⁹⁾と記している。またページは、下記のようにまとめてもいる。

On 18 September he wrote a letter to Macmillan headed ‘Private’; it enclosed the poem ‘Panthera’, which is based on an apocryphal story that Jesus was the offspring of an adulterous relationship between Mary and Panthera (or Pandera), an officer in the Roman army.... Macmillan could at that time have rejected the poem, but they

decided to take the risk and publish it.²⁰⁾

ページの言及を補う意味でも、ハーディがマクミラン社へ出した意見を請う手紙の1部を引用する。

But I should like you or your cousin, or any trusty reader at hand for subjects of this kind, to decide whether to include it or not. To divines of the Highter Criticism, Dr Cheyne for instance, there is, of course, no harm in it at all, the legend being well-known to such scholars – but I do not want to provoke acrimony amongst well-meaning but narrower minded people for the sake of one poem, good or bad.

On the other hand I do not want to leave out a piece which may be liked by advanced readers, & may possibly start a good wholesome controversy: poetry, as you know, is sadly in need of some stimulus to set it going.

You understand these practical matters better than I, so will you say frankly what you think. It comes near the end of the book, so there is time to settle the question before the printers get to it.

Sincerely yours
Thomas Hardy.

P.S. I have omitted to mention the rather important detail that since the objectors read it I have rewritten the poem, & made the events a possibly erroneous fantasy of the narrator – which I think removes all objection. However, you decide. T.H.²¹⁾

この手紙から、詩に関しては賛否両論あり、危険をはらんでいると判断したハーディが、アンビギュアスな物語にして、オブラートに包むような詩に書き換えたことが理解できる。9月18日付けのこの手紙の後、24日にハーディはマクミラン社へ礼状を出している。

ページが指摘するように、出版には危険が伴ったであろう。しかしそれでもなぜ出版に踏み切ったのであろうか。マクミラン社の真意は定かではない。けれども、本稿の始めの部分で触れたハーディの考え方に則って——多様な読みを記録することに重点を置いて——出版したのではないかと推察したい。

ではこの詩に描かれた語り手と、生みの父親であるパンシラと、養父に焦点を

当ててみる。

I [narrator] had said it long had been a wish with me
That I might leave a scion – some small tree
As channel for my sap, if not my name –
Ay, offspring even of no legitimate claim,
In whose advance I secretly could joy.
Thereat he [Panthera] warmed. (31-36)

語り手はパンシラに、「若木を一本残すこと—私の樹液の流れた小さな木を。私の名前でなくてもいいのだ—そう、非嫡出子でもいいのだ」と言う。父として名乗れなくてもいいので子どもがほしという発想に着目したい。現代でもシングルマザーの数は多いが、自ら進んでシングルファーザーになる男性はどれだけいるのだろうか。ヴィクトリア朝時代には家督や遺産を継がせるために、男児がほしいという男性は多く、そのために女性は犠牲になった。ハーディの短編「グリーブ家のバーバラ」(‘Barbara of the House of Grebe’)²²⁾のアップランドタワーズ卿(Lord Uplandtowers)は、その典型的な男性の1人である。ところがこの語り手は生物学的に子どもがほしいと言っただけだ。これは特異なケースである。

ではパンシラはどのような男性なのだろうか。

We met, and met, and under the winking stars
That passed which peoples earth – true union, yea,
To the pure eye of her simplicity.

‘Meanwhile the sick found health; and we pricked on.
I made her no rash promise of return,
As some do use; I was sincere in that;
I said we sundered never to meet again - (140-146)

「真実の結びつき」を持った女性と別れる時、「私は彼女に戻ってくるという軽率な約束はしなかった。そうする人たちもいたが、私はその点真面目だった。別

れたら再び会えないと言った」とある。これは、たいていの男性はまた戻ってきてその時には正式に結婚するよと、女性に期待を持たせておきながら、その実そのまま別れてしまう。しかし自分は今だけを楽しむような男性ではないという意味だ。パンシラのこの言葉を裏付けるのが、次の語り手の言葉である。

This was a tragedy of his Eastern days,
Personal in touch – though I have sometimes thought
That touch a possible delusion – wrought
Of half-conviction carried to a craze –
His mind at last being stressed by ails and age: –
Yet his good faith thereon I well could wage. (25-30)

パンシラの悲劇は「個人的なもの」で、個人的なものとは女性との関係をさし示している。その関係を「気が狂うような半ば罪の自覚として働くようなもの」と述べ、その後の経緯にパンシラは苦しんでいる。そして語り手は、パンシラには「誠実さがあつたと誓って保証する」と断言している。この箇所から、女性との関係を一時の戯れとしてみなすような男性ではないと確認できる。

では3人目の男性はどのようなタイプなのだろうか。

(For so I guessed him). And inquiry made
Brought rumour how at Nazareth long before
An old man wedded her for pity's sake
On finding she had grown pregnant, none knew how,
Cared for her child, and loved her till he died. (157-161)

「ナザレでずっと以前、1人の老いた男性が彼女（パンシラの相手）への哀れみから結婚した。誰にもなぜかはわからなかったが、妊娠を知った時、彼女の子どもの世話をし、死ぬまで彼女を愛したのだ」とある。つまり彼女は身籠ったままこの男性と結婚する。彼女からではなく、この男性が彼女を愛して求めたのだ。だから彼女に別の男性の子が宿っていても、自分の子どものように可愛がったの

だ。

3人の男性をまとめると、語り手は正式な結婚を望まず純粹に我が子を切望した男性である。パンシラは結婚したくてもできない環境であり、自分に子どもがいることを30年経って初めて知る。老いた男性は、自分のためではなく、女性と子どものために結婚して、その子どもを養育する。それぞれの男性は正統派ではなく、社会的、慣習的には変わり者として烙印を押されるような男性である。この時代に、宗教的観点から糾弾されるかもしれない危険を冒してでも、1編の詩の中に、このように稀なタイプの3人の男性をなぜ描いたのであろうか。それは当時の男性像に懐疑を持っていたからではないだろうか。男性像への疑問を提示するために、数少ない男性のタイプを意識的に描いたと結論付けたい。

ハーディが我々読者に示した多様性を考察してきた。この多様な読みは、当時のコンベンションやドメスティック・イデオロギーへ我々の関心を向けさせる。そして男性像や女性像に関しての再検討を迫る。また人間社会全体、いやそれだけではなく、地球上のすべての生き物との共存への関心を我々に促してもいる。ハーディは当時の社会環境や習慣などに振り回されることなく、自分の考えに忠実に自分の表現したい内容を、語句と形式を駆使して詩に描いた。それはその時代の感覚や考え方から逸脱していて、受け入れられることが難しいものもたぶん含んでいた。けれども今21世紀に生きる我々読者から見れば、未来を超越したハーディの慧眼であったのだ。

注

* 本稿は日本ハーディ協会第53回大会（2010年10月30日、於：同志社女子大学）で口頭発表した原稿に加筆修正を施したものである。

1) Florence Emily Hardy, *The Life of Thomas Hardy 1840-1928* (1962; rpt. Hamden, Connecticut: Archon, 1970) 284.

2) F. R. Leavis, "Hardy the Poet," *Thomas Hardy: Critical Assessments* Vol.2, Ed. Graham Clarke (Mountfield, East Sussex: Helm Information, 1993) 221.

3) Irving Howe, *Thomas Hardy* (London: Macmillan, 1985) 163.

4) C. Day Lewis, "The Lyrical Poetry (1951)," *Thomas Hardy: Poems*, Eds. James Gibson and Trevor Johnson (1979; rpt. London: Macmillan, 1985) 149.

- 5) W. H. Auden, "A Literary Transference," *Hardy: A Collection of Critical Essays*, Ed. Albert J. Guerard (Englewood Cliffs, N. J.: Prentice-Hall, 1963) 139-40.
- 6) Thomas Hardy, *The Complete Poems of Thomas Hardy*, Ed. James Gibson (1976; rpt. London: Macmillan, 1986) 以下、詩は本書から引用して、本文中に括弧で行を示し、特に言及する箇所引用文には下線を施す。但し取り上げるのは第1詩集、第2詩集、第3詩集とする。
- 7) James Gibson, "Thomas Hardy's Poetry: Poetic Apprehension and Poetic Method," *Celebrating Thomas Hardy: Insights and Appreciations*, Ed. Charles P. C. Pettit (London: Macmillan, 1996) 9.
- 8) Michael Alexander, "Hardy Among the Poets," *Thomas Hardy: After Fifty Years*, Ed. Lance St. John Butler (1977; rpt. London: Macmillan, 1978) 55.
- 9) Stephen Ullmann, *The Principles of Semantics* (Oxford: Blackwell, 1959) 280.
- 10) Joseph M. Williams, "Synaesthetic Adjectives: A Possible Law of Semantic Change," *Language: Journal of the Linguistic Society of America* 52.2, Ed. William Bright (Baltimore: Waverly, 1976) 463-4.
- 11) 「薄暗がりの中の鶉」("The Darkling Thrush") には似た論理展開がある。この点を中心に論じた拙論「トマス・ハーディの7つの詩について」『関西外国語大学研究論集』第67号(1998年)を参照。
- 12) 10月11日から3週間、名古屋で生物多様性条約第10回締約国会議(国連地球生き物会議cop10)が開かれた。
- 13) Thomas Hardy, *Jude the Obscure* (The Pocket Edition, London: Macmillan, 1956) 421.
- 14) ベイリーは、ハーディを引用しながら次のように記載している。この詩は事実に基づいており、原稿にはジェニーではなく、「ネリー」("Nelly")と書いたことが、エドモンド・ゴス宛の手紙に記されている。ハーディが祖母からこの種の話聞いたのではないだろうか。フェニックス・インはドーチェスターのハイ・イースト・ストリートにあるとても古いインで、南側のセント・ピーター教会から約300ヤード東にあって、兵士たちがしばしば集まったお気に入りの場所であつたらしい。J. O. Bailey, *The Poetry of Thomas Hardy: A Handbook and Commentary* (Chapel Hill: U of North Carolina P, 1970) 81 参照。
- 15) Dennis Taylor, *Hardy's Literary Language and Victorian Philology* (Oxford: Clarendon, 1993) 335.
- 16) Paul Zietlow, *Moments of Vision: The Poetry of Thomas Hardy* (Cambridge, Massachusetts: Harvard UP, 1974) 119.
- 17) Albert J. Guerard, *Thomas Hardy* (New York: New Directions, 1964) 173.
- 18) Lance St. John Butler, *Thomas Hardy* (Cambridge: Cambridge UP, 1978) 162.
- 19) *Oxford Reader's Companion to Hardy*, Ed. Norman Page (Oxford: Oxford UP, 2000) 361.
- 20) Page, 422.
- 21) *The Collected Letters of Thomas Hardy* Vol.4 1909-1913, Eds. Richard Little Purdy and Michael Millgate (Oxford: Clarendon, 1984) 47-8.
- 22) Thomas Hardy, *Collected Short Stories* (The New Wessex Edition, London: Macmillan, 1988)

SYNOPSIS OF THE ARTICLES WRITTEN IN JAPANESE

Thomas Hardy and the Country House

KAORUKO SAKATA

When asked what makes its presence felt most in *A Laodicean* (1881) by Thomas Hardy, one might answer that it is not its hero or heroine to whom the title refers, but Stancy Castle which silently witnesses many incidents involving the hero and heroine. The socio-cultural studies by Mark Girouard and the Marxist studies by Raymond Williams on the function of English country houses in society and literature make us expect Stancy Castle to play some symbolic role: therefore, this paper, in its discussion of the works of Jane Austen where country houses are essential, tries to examine what assertions of Hardy's can be identified in his description of country houses. The first section of the paper analyzes the role played by country houses in Hardy, and concludes that, compared with Austen whose country houses embody Britain's superior character and values, there exists a great difference between their attitudes toward the upper classes. On the other hand, Sections 2 and 3 aim to explain clearly that both of them are quite conservative with regard to the issues of class and race. As for the issue of class, as is obvious in *A Laodicean* and *The Hand of Ethelberta* (1876), not only in the works of Austen but also in those of Hardy, the newly-rich classes are not trusted to manage country houses; whereas, as to the issue of race, as is implied in *A Laodicean*, both in Austen and Hardy, we can find a conservative attitude which eliminates those who are not born or brought up in the English mainland through the inheritance of country houses.

Representations of Servants in *The Hand of Ethelberta*

— A Cultural Approach—

MIHO NISHIMURA

The Hand of Ethelberta (it will be abbreviated to *HE* in the following) caused negative reactions to its readers when it was first published. It was mainly because the mode of the novel is extremely different from the pastoral one of its predecessor, *Far from the Madding Crowd*, but it can be said that representations of servants in *HE* also influenced the impression of the readers not a little. In this article, it is discussed how servants are represented in *HE*, focusing on their behavior and fashion and comparing it with the cultural context of Victorian servants' lives and clothes.

A lady's maid, Menlove who threatens the heroine, Ethelberta is depicted as rather problematic existence. She is not a common lady's maid in those days at all but an exceptionally dangerous one. In fact, maids were potentially threatening existence for their employers, as they come to know their employers' private lives. However, usually they were obedient and unseen existence. Hardy not only illuminates on the servant problem which is the very nuisance for governing class but also embodies their latent threat to their employees in *HE*. On the other hand, Ethelberta who comes from servant class promotes to a lady by getting married with the son of the house where she worked as a governess and tries to gain a stable position by remarriage after her husband died, keeping her family and her career secret. It means that she and her whole family deceits governing class and makes them upset. The text of *HE* depicts her appearance and reality so contrastive that the readers never forget her origin. Therefore, the plot of this novel is very comical but can be rather threatening and even uncomfortable one for the employing class readers in particular, as it not only reminds them of the servant problem, but also embodies their latent threat to their servants.

“We and the Rest of the Country” :

Nationalism in *The Trumpet Major*

YUKI TSUCHIYA

The criticisms on *The Trumpet Major* have focused on the dynamics of relations between the national history, the “recorded history” in the narrator's words, and the individual history, the “unwritten history.” This paper, although relying on this binary opposition, offers a different perspective in reading this relation between them.

One of the famous scenes which depict the encounter of the “recorded history” and the “unwritten history” is the one where the heroine Anne Garland watches the King and his family come to Wessex. Anne feels that she is now “close to and looking into the stream of recorded history,” while “she and the general bulk of the human race were content to live on as an unreckoned, unheeded superfluity.”

However, Anne and Robert Loveday, a brother of the eponymous character John Loveday, encounter and seem to merge into the “recorded history” through such events as Robert's boarding Nelson's flagship. Robert then further develops his nationalistic view which can be shared with the narrator. In the scene where a beacon was lit up to falsely inform Napoleon's landing, the narrator adopts the pronoun “we” to describe the craze of the people of 1804, which suggests that the narrator is here being united into the imagined community of the nation.

The story seems to justify this kind of nationalism. It is revealed at the end that Anne accepts Robert's proposal while John, another suitor of Anne, was killed on “one of the bloody battle-fields of Spain.” However, if we consider that it is also possible to regard the fictional story as the “recorded history,” then John's story can be called “the recorded history,” in that his life is recorded in the story. In that sense, everything in the novel becomes the “recorded history” at the moment it was written and thus, recorded. Therefore it can be concluded that the dichotomy of the “unwritten history” and the

“recorded history” is dissolved not only by the action from those involved in the “unwritten history” but also by Hardy’s positive act of recording which turns “the unwritten” into “the recorded.”

Hardy’s Perspective as Revealed through His Poems:

“Diverse Readings” on Living Creatures, Time, and Human-Beings

CHIZUKO WATARI

This paper examines Hardy’s perspective as revealed through three poems. In the preface to the poems Hardy states that “[u]nadjusted impressions have their value, and the road to a true philosophy of life seems to lie in humbly recording diverse readings of its phenomena.” I will present examples of Hardy’s perspective as demonstrated in his poetry.

When we read the poem *An August Midnight* while focusing on the sensory imagery, it seems to indicate that we, human-beings, are arrogant. Hardy makes us conscious that we and insects are equal on the earth. We cannot overlook this point of view as an indication of “diverse readings of its phenomena.” We ought to feel that it is important to consider the relationship between mankind and the other living things, and how they can live together in harmony, especially when we consider COP10 (Conference of Parties 10) held last year in Japan. One century ago Hardy foresaw the circumstances which we now face.

In *The Dance at the Phoenix* the impact of the passage of time occurs to the heroine. She seems to be as lively at 59 years of age as when she was 16 years old though this is a curious situation. She is simultaneously alive in the two worlds — in the combination of past and present. This way of thinking about time is another example of “diverse

readings of the phenomena.” She seems to have been dead during her life as in the Victorian expression “an angel in the house.” Hardy expresses his rejection of that Victorian convention.

Norman Page wrote that “the poem ‘Panthera’ ... is based on an apocryphal story that Jesus was the offspring of an adulterous relationship between Mary and Panthera (or Pandera), an officer in the Roman army.” I’d like to focus my attention on three men (the narrator, Panthera, and the foster father) who are depicted as exceptional men. I conclude that Hardy intentionally portrays them as exceptional because he was skeptical about the stereotyped attitudes of average Victorian men.

日本ハーディ協会会則

1. 本会は日本ハーディ協会 (The Thomas Hardy Society of Japan) と称する。
2. 本会はトマス・ハーディ研究の促進、内外の研究者相互の連絡をはかることを目的とする。
3. 本会につきの役員をおく。
(1) 会長1名 (2) 顧問若干名 (3) 幹事若干名 (4) 運営委員
4. 会長および顧問は運営委員会が選出し、総会の承認を受ける。運営委員は会員の意志に基づいて選出されるものとする。運営委員会は実務執行上の幹事を互選する。会長および顧問は職務上運営委員となる。役員の任期は2年とし、重任を妨げない。
5. 幹事会は会長をたすけて会務を行う。
6. 本会はつぎの事業を行う。
(1) 毎年1回大会の開催 (2) 研究発表会・講演会の開催
(3) 研究業績の刊行 (4) 会誌・会報の発行
7. 本会の経費は会費その他の収入で支弁する。
8. 本会の会費は年額4000円(学生は1000円)とし、維持会費は一口につき1000円とする。
9. 本会に入会を希望する者は申込書に会費をそえて申し込まなければならない。
10. 本会は支部をおくことができる。その運営は本会事務局に連絡しなければならない。
11. 本会則の変更は運営委員会の議をへて総会の決定による。

- 附則1. 本会の事務局は当分の間中央大学におく。
2. 本会の会員は会誌・会報の配布を受ける。
 3. 選出による運営委員の数は会員数の1割を目安とする。

(1987年10月改正)

編集委員

金子幸男 佐野 晃
玉井 暲 永富友海
永松京子 新妻昭彦 (委員長)
深澤 俊

ハーディ研究

日本ハーディ協会会報第37号

発行者 玉井 暲

印刷所 中央大学生協同組合

2011年9月10日 印刷

2011年9月15日 発行

日本ハーディ協会

〒112-8681 東京都文京区目白台2-8-1 日本女子大学内

